

橫濱高等工業學校

創立十周年記念出版

自由教育十年

創立十周年記念出版

自由教育十年

橫濱高等工業學校發行

序

本校は創立滿十周年を迎へた。正確に言ふと、大正九年一月十九日に設置を公布されたのであるから、昭和五年一月十八日が正に十周年に當るのである。

滿十周年と言ふと、どこでもお祝ひをするのが普通である。本校でも大にお祝ひをしたいのであるが、時節柄お祭騒ぎは一切差控へて、何か記念に残るものをと考へて本書を刊行した次第である。

尤も斯る場合に刊行される記念出版は、大抵は數字的のものが多いのである。それは數字が一番簡明にその内容を示し得るからである。然し徒らなる數字の羅列では、第一讀んで呉れる人が少ない。

讀まれず、知られなければ折角の印刷は無駄である。

本書が従前の所謂記念出版の型を破つたのは、讀まれない。知られない。理解されたいと言ふ願ひから御覽のような内容、外觀を選んだのである。

本書により、本校教育の趣旨、並に内容の一斑を記憶せらるゝ機ともなり得れば幸甚であり、記念出版の意義が生きる譯である。

昭和五年十月

横濱高等工業學校長

鈴 木 達 治

自由教育十年目次

中秋月明に稿を起す	一
大震災災のその日	二
復興の第一聲を揚ぐ	七
我校罹災報告書	七
在校生への聲明書	一五
卒業者への聲明書	一八
晴天霹靂の移轉命令	二一
移轉反對の決意	二三
移轉反對上申書	二八
國民精神作興の詔書	三一
焼跡整理の奉仕	三三

我復興勞働團檄	三四
震災記念獎學資金	三八
斯くして創設せらる	四一
増科と校運の發展	四六
原復興會長の激勵	四七
我復興擴張建議	四九
自由教育の趣旨	五四
無試験無採點主義	六一
現代教育に對する不滿	六三
無處罰と無賞主義	六八
目標の樹立	七三
文化と創作力の重心	八〇
産業開發と我復興	八四

海外發展の機關……………	八六
誇るべき校友會の活躍……………	八八
我校復興建築の經緯……………	九一
各科の過去現在……………	九四
我校八年畧史……………	一二一

中秋月明に稿を起す

今宵、陰曆八月の十五日である。窓を排すれば薄雲に包まれた中秋の明月が、弘明寺森の彼方に懸つてゐる。澄み渡つた空、飽まで静かな夜半である。

頭を回らして十年の過去を顧み、校史の初行にインクを染めんとしてペンを按ずれば、万感の交々胸に逼るを覺える。天地の悠久に較ぶれば十年は只だ夢の如きであらう。然し又産みの母として、育ての親として十歳の年月を送り、迎へた身にとつて見れば、この十年は餘りに長く、餘りに事繁かりしことを嘆ぜざるを得ないのである。

大震火災のその日

分けて彼の關東大震火災は、忘れんとして忘るゝ能はざる、一代の恨事である。既に七周年を經過した今日ではあるが、私共學校教職員一同は、今猶當時を偲ぶべく毎年九月一日を期して震災追憶會を開いてゐる。又一同の申合せにより、校舎の復興建築成るまでは、式日にも禮服を着用せざることを申合せて、今日に及んでゐる。校舎を失ひ、七年後の今日猶バラツク住ひを餘儀なくせられつゝある我校にとつては、大震火災は記録的な過去の問題ではなく、實に生々しき今日の問題でなくてはならぬ。稿を大震火災の追想に起す蓋し理の自然である。

大正十二年九月一日私は、平常の如く出校す。午前十一時過ぎ横濱銀行集會所に赴かんとして、自室を出で、教務課に入り、四五の職員と教務の要談をなす。時に突如激震の襲ふところとなつた。要談中なりし職員はいづれも逸早く室外に遁れ出でたが、私は獨り室内に留まつた。然し事態は愈々急を告げたので廊下に出た。この時既に四方の壁は破壊して、土砂は濛々咫尺を辨せず、加ふるに動搖甚だしくして歩行も自由ならぬ有様であつた。

この間にも私は靜かに脱出の箇所を物色しつゝあつたが、廻廊下の安全なるを見極めて、その方向に進んだ。折しも廊下は、急に右方に傾斜し來つたので、機を逸せず身を躍らせて左方に飛び越え、辛くも身をもつて校庭に出づるを得た。

私は直ちに走つて避難せる職員を督し、地震には必然的に附隨する火災の難に備へんとした。然るにこの時早くも應用化學科並に電氣化學科教室方面より、白煙を揚げ始めたので、消火栓を開きホースを連絡したが、水道鐵管破壊の爲めに一滴の水も出ない。斯る間に白煙は火と變じ、火は更に四方に延焼し來つた。又化學實驗室に當る方向には炭酸、水素等のボンベの爆發する音が物凄く聞えて來る。この間にも延焼防止の手段として、廻廊下の破壊に着手したが、破壊用具もなく、且人手少なくて其目的を達することが出来ない。歇むなく自然の暴威に委するの外はないことゝなつた。

火の猛威は遂に校舎の大部分を包んで了つた。私共の誇りとした講堂も白煙に掩はるゝに及んで万事休矣、この上校庭に留まるの益

なきを知つて集つた教職員に退散して、家事を護る可き旨を告げ、私は根岸芝生一里の里程を徒歩せんと志した。時に午后三時であつた。

この時は既に市内各所に火災が起つり、あつたので、後事を居残りの小使に托して、學校裏山に道を取り、八幡橋に出でた。刑務所が盛んに燃え、橋の前には貨物自動車が埋没し、磯子方面にも火災が起つてゐた。海岸より遙かに横須賀方面を望むと黒煙天に沖して凄壯を極めた。歸宅すれば、幸ひ家は倒壊を免かれ、家族も亦無事なるを確めた。私は家事の憂ふるなきを見て、再び踵を還して學校へと向つた。

學校裏山に辿り着いて、校舎を下瞰すれば、校舎は既に熱灰と化

して了つてゐる。只だ僅かに機械工學科の一部が残つてゐるに過ぎない。變り果てた我校の姿に思はず涙せられた。校庭に取出された重要書類は、これを機械工場に運んで保管し、能ふ限りの跡始末の後、七時再び山を越へて歸宅せんとせしも、時既に陽落ちて道を失はんことを恐れて、方向を蒔田方面にとつたが、これ亦火災の爲め遮られたので轉じて山を登り英和女學校の校庭に出て、安全なる歸路を案じつゝ市中を望めば、全市は今や焔に卷かれ、宛然たる火の地獄である。

ボンベイの最後、恐らく歴史に二つの記録を残すであらうと長太息をなし、山を下つて道を堀の内に出て中村町より家に歸つたのは夜の九時を過ぎてゐた。この途中の慘狀は更に甚だしく、或は火に

追はれ、或は倒壊家屋の屋根を越え、心勞、困苦を嘗め盡したのであつた。

この夜は避難者と共に庭前に蚊帳を吊り寢に就いた。恰かも陰曆七月二十一日の月は中天に懸り、無心に下界を照してゐる、凄慘一入身に泌むを覺えた。

復興の第一聲を揚ぐ

翌二日私は庭前に卓子を据ゑ、文部大臣に宛てた學校の罹災報告書を認めた。全文は次の如くである。

報告書

一、九月一日小官出勤執務中、正午少し前突然激震に逢ふ。小官脱出に稍機を失し、辛ふじて逃れ校庭に出づ、震始後僅かに數分にして、既に電氣化學科及應用化學科實驗室より火氣を認む。直ちに消火栓を開き、消火に従事せしめんとするも鐵管に一滴の水なし。更に廊下工事破壊に着手せしも、人手なく效を奏せず、機械工學科工場一棟、水力實驗室一棟、職工控室一棟、寫眞印刷室一棟（縣有）應用化學特別工場（小建築）一棟を残し、他は全部焼失せし事、實に遺憾千萬なり。

猶重要書類を藏する會計課保管の金庫は執務中開扉せしものを閉鎖せんとせしも激震の爲め既に扉を損じ閉鎖不能に陥れり。此が爲め内容幾分持出したるも、危険にして屋内作業を許さず、已むなく焼失に委したり。

今回の震災は當市殆んど全部を赤土に化し、本校職員中住居を失ひしも

の多く、又多少の負傷をなしたるものあり、當日出勤者外の職員に就ては未だ一人だに消息を詳にせず。小官夜に入り歸宅の途を失したる程にて、火災四方に起り交通殆んど杜絶したる爲めたり。謹んで報告す。

大正十二年九月二日

横濱高等工業學校長

鈴木 達 治

文部大臣 鎌田 榮吉殿

右の報告書と共に別に安河内神奈川縣知事に宛て、人心動搖の因をなす不逞の徒を逮捕して、港内碇泊の汽船内に監禁すべき旨の建白書を添へ、使者をして知事官舎方面に赴かしめ、直接知事に手交

し、文部省報告書の傳達方を依頼した。

越えて七日混亂と不安と死屍の街を横切つて假設の縣廳に安河内知事、市役所に渡邊市長、商業會議所に井坂會頭、野村洋三、戸井嘉作諸氏を訪ひ、更に日本橋を経て弘明寺に至り、學校裏なる飯塚教授宅に開かれし、最初の職員會議に列して種々善後策を講ずるところがあつた。

八日文部省より川原與作、四方田三四郎兩屬が慰問使として、私宅を訪問された。兩氏は七日東京を出發して夜半縣廳に着し、一泊の上縣吏の案内によつて來られたものであつた。文部省に於ては學校の消息不明、且校長の身上に不安の噂を耳にせるが爲め特使を送つたのであつた。好意と勞苦を謝し、相共に學校に赴き具に實情を

視察したる後、これを送つて久保山に到り、手を握つて相別れた。

十日上京して文部省を訪ねんとし出發したが途中學校の小使自轉車にて後を追ひ來つた。天候不安の故を以つて學校より引留めの使者であつた。十一日改めて上京す。平時なれば本日より夏休暇明けの新學期第一日である可き筈である。人事不可測、寸前暗黒の感深からざるを得ない。

横濱驛より無蓋の貨車に乗る。残暑は頭上を灼熱し、身體の屈伸さへ自由を欠く壽司詰め車は、遂に東神奈川驛で脱線騒ぎさへあつた。品川で乗換へて池袋驛に下車したのは午后二時過ぎであつた。それより徒歩して小石川大塚の東京高等師範學校内に假設せられた、文部省を訪ねた。この訪問は赤司次官や、栗屋實業學務局長に會つ

て學校の様子を知らせ、又今後の方針に就いて尋ねたいことがある爲めであつたが、文部省に於て翌十三日には罹災直轄學校長會議が開かれるのでその會議に出席することゝした。この會議は直轄學校の罹災校救急を議する目的であつたが、我校は被害餘りに甚大にして、校長の出席も困難なるべしと見られ其通告さへなかつたことが判明した。その日は東京に留まり、翌日會議に列して、席上學校罹災の状況を報告した。且我校は此際バラックにても校舎を急造し、授業を開始して、横濱復興の魁となり、以つて人心を鼓舞せん事に努めたし。との希望を附言したのであつた。

十四日には焼残つた職工控室に於て職員會議を開き、私から文部省側の意嚮を述べたが、衆議は期せずして、他力を待たず、自力を

以つて授業開始の手段を講ずべしとの堅き決意を示した。即東神奈川の横濱舎密研究所に應用化學科及び電氣化學科第三年の分教場を設け、日本カーボン會社を以つて寄宿舎に宛てんことを企圖した。そうして翌十五日は早くも市中四箇所の要所即ち日本橋、馬車道、横濱驛並に學校前に立札を建て、書して曰く

假校舍を急造し、成べく速に授業開始の豫定

横濱高等工業學校

この立札の開校聲明は、恐らく復興横濱の第一聲として、當時の市民を勇氣づけるに充分であつたことを信ずるものである。

附記横濱舍密研究所は、大正五年中村房次郎氏の創立したる化學工業に關する研究所たり、大正十年以後は専ら原富太郎氏の出資によるものにして、本校は茲に計らざる便益を受くるに至りしことを感謝するものである。

一方私は建築請負業清水組に交渉して、百坪のバラック建を學校敷地内に建設せんと計畫を進めた。勿論豫算金額のある筈はなく、全く獨斷を以つて工事を委嘱したのである。

更に續いて十七日には在學生に對して次の如きステートメントを發表した。

九月一日の峻烈なる激震は大火災を伴ひ、遂に我横濱市をして全滅に近き慘狀を呈せしむるに至り、本校も亦自ら火を失して概ね烏有に歸したるは、洵に遺憾とする所であります。願れば本校は開校以來職員、學生諸君と共に拮据經營、茲に三年有半を経過し、今や設備成つて聲名共に高からんとするに方り、一朝にして此の災厄に遭ふ眞に痛恨に堪へません。

然して罹災せる職員及び、學生の消息は共に知悉せんと欲する所であり又共に報導せんことを望む所であつたが、如何せん通信機關の杜絶と、交通機關の破壊とによつて意の如くならず、殊に在郷の學生諸君に對する音信の遅延したるも亦止むを得ざるによつたのであります。

本校が此の不幸に遭遇して、然かも職員中一人の死亡したるものなく、又本日迄に知り得たる所によれば、學生中にも死傷者なきが如し、果して

然りとせば最も慶幸とする所であります。茲に職員學生は一致協力して速かに復興の實を挙げ、以つて十二日喚發せられたる、大詔の御趣旨に副ひ奉らねばならぬと信ずるのであります。乃ち本校は文部省の方針に基き、假校舎を構内に急造し、更に横濱舍蜜研究所を借受け、又假寄宿舎の設備をなし以つて成べく速に授業を開始せんことを籌畫し、凡そ第三學年は十一月一日より、第二、一學年は十二月一日より始業し得る豫定であります。仍て學生諸君に於ては、其間多少の餘日あるを以つて、各自自修に努め、貴重なる此の光蔭を空過せざらん事を望むと共に、此の不慮の天災地變に由る困難に際し、毫も意氣を沮喪せず、捲土重來の勇を鼓し、進んで將來の發展を企圖し、自由啓發の學風を確立し、以つて他日の大成を期せん事はれ我が大國民の資格を完うする所以にして、我校の責任重大なりと信じ

ます。切に諸君の健康を祈る。

大正十二年九月十七日

横濱高等工業學校長

追て授業開始期日確定の上は、教務課より更に詳細通知します。

開校の準備は職員一同の一致協力によつて着々その歩を進めた。この準備の策源地は實に構内に焼残つた僅か二十坪の木造平屋建の職工控室であつた。十四日教職員會議をこの一室に開いて以來、爰所を總ての事務室とした校長室でもあり、教務課でもあり、庶務課でもあり、會計課でもあり、又圖書課でもあつた。此一室は實に我が校が大震災火災復興には忘れられぬ記念堂である。然かも此一室丈け

不思議にも壁に龜裂一つ生じないで立派に保存せられたのであつた。

この學校側の斷乎たる開校決意に共鳴して、各國各地に散在した全校生徒は、焦土の横濱を指して續々歸つて來た。或者は梨を携へ、或者は野菜を携へ、或者は牛肉を携へ、或者は菓子を携へて私の宅を訪れて呉れた。そうして中には『學校の焼けた位ひは何んでもないが校長先生が御無事であつたのが、何より嬉しかつた』と眼に涙を一杯にして慰問して呉れた者もあつた。

私は更に學校の決心を卒業生にも告ぐる必要を感じて二十一日附で次のやうなステートメントを發表した。

親愛なる卒業生諸君、九月一日の震災は、前古未曾有の慘害にして、遂に

我横濱市をして全滅に近からしむるに至り、本校も亦自ら火を失して機械工場の一部を除き、概ね烏有に歸したるは、洵に遺憾とする所であります。願れば本校は開校以來諸君と共に創業の事に従ひ、桔据經營茲に三年有半を經過し、今や設備成つて聲名共に高からんとするに方り、一朝にして此の災厄に遭ふ、眞に痛恨に堪へません。

然して京濱地方に住せらるゝ諸君の中に罹災せられ同情に堪へざるものもあるべく、諸君の消息は努めて本校の知らんと欲する所であります。本校は此の不幸に遭遇して幸にも職員中一人の死亡したるもなく、又本日まで知り得たる所に依れば卒業生及び學生中にも死傷者なきがごとし、若し然りとせば最も慶幸とする所であります。乃ち我等は共に一致協力して、速かに復興の實を挙げ、以て去十二日煥發せられたる、大詔の御趣旨

に副ひ奉らねばならぬと信ずるのであります。本校は假校舎を構内に急造し、更に横濱舎密研究所を借受け、又假寄宿舎の設備をなし、以つて成るべく速かに授業を開始せんことを籌畫し、凡そ第三學年は十一月一日より、第二、一學年は十二月一日より始業し得る豫定であります。

我自由啓發の學風を擁立したる卒業生諸君、此不慮の天災地震による困難に際し、毫も意氣を沮喪せず、自奮自發一段の努力を以つて事に當り、進んで將來の發展を圖り、以つて他日の大成を期せん事、是れ我が大國民の資格を全うする所以にして、我等の責任重大なりと信じます。切に諸君の健在を祈る。

大正十二年九月二十一日

横濱高等工業學校長

晴天霹靂の移轉命令

大震火災後旬日を出でずして、これ丈けの開校準備をすることは並大抵の苦心ではなかつた。事實私共の心理は悲壯そのものであつた。内には家族の爲めに夫々頭を悩まさねばならなかつたし、物資の窮乏にも耐へねばならなかつた。私なども自宅から學校まで一里餘の道を通はねばならなかつた。色々な要務で外出すれば横濱驛へ一里半、東神奈川の分教場へは三里、市役所、縣廳へ一里半と言つた状態である。私は足袋裸足で、竹の杖をつき、必ず握り飯二箇と茶を入れた魔法瓶を腰にして、毎日平均四五里の道を徒歩した。汗

は額からポトポトと流れ落ちた。今でも當時を思ひ浮べる毎によく身體が續いたものだと感じする。誰も彼も汗みどろ、血みどろになつて一意専心我校の復興に必死の力を捧げたのであつた。この努力の結果は誰人にも當然認めらるべきことゝ信じてゐたのであつたが、計らざりき晴天霹靂の移轉命令が出ようとは。

私は二十一日再び文部省を訪れた。實業學務局長に面會すると、實に意外千萬な話があつた。それは名古屋の地方幼年學校が、前年より廢校となり、その建物が空いてゐるので我校は一時そこへ立退させよ。愛知縣及び名古屋市の希望もあり、すでに大藏省にも其旨を通じたり、との話であつた。然かも、その時愛知縣及名古屋市よりも態々當局者が文部省に來てゐるのであるからと速答を促かされ

た。

局長は兎に角次官に相談せよとて相伴つて次官に面接した。次官は横濱市の被害は特に甚だしく、罹災民は住むに家なき有様である今日、バラックを建るにしても學校よりも罹災民を先にせねばならぬ。故に學校は一と先づ安全の場所に避難すべきである。——と切論した。

私はこれに應へて、お説は御尤もである。然し今横濱唯一の直轄學校が一時なりとも他に移轉することは、營々として焦土の中に立ち復興を目指しつゝある市民には、如何に大なる失望を與へるであらう。これが爲めに市の復興と安定に暗影を與ふことは、私の到底忍び得ざるところであると苦衷を述べた。

又私は極力次官の意見に抗し、且つ言つた『私は如何に困難を忍ぶも横濱退去は致し兼ねます』と斷言した。次官も色をなして『歸つてよく考へて見よ』と言はれた。私は暗い心を抱いて文部省を去つた。

その日の日誌に私は當時の覺悟をこう書き入れてある。

余は三年半間、横濱と學校の爲め、及ばずながら努力して來た。横濱の大災難を目の前に見て、之を去り、二年か三年の後、横濱が安全になつて悠々三百六十の學生、百人近い職員部下を引き連れて何んの面目あつて歸つて來られるか、是非に名古屋へ行けとの命令ならば、余は辭職して浪人する覺悟をきめて文部省を去る。

午后四時を二十分程過ぎた。雨がバラバラと降りだした。電車で水道橋を経て若松町に降りた。此からは電車がまだ開通せぬのでトポトポと歩いた。雨は次第に強くなつた。新宿附近に來ると盆を覆へす雨となり、歩行が出来なくなり、濡れねづみの様になつた。路傍の小屋に雨宿りをして、其處にあつた鐵砲壽司と小豆の煮た、もちのない汁粉を一杯食して夕飯とした。

代々木山谷の知人の家に、悶々たる一夜を明かして、翌日は麻布三河臺に大藏大臣井上準之助氏を訪問した。私は裸足のまゝである案内があれば裸足のまゝで應接間へ這入ろうと考へつゝ待つてゐると、玄關子は、只今長引く來客があるので十二時半から一時半まで

の間に日本銀行へ来て呉れとの事であつた。その歸途日本銀行理事
深井英五氏を私邸に訪問して、井上藏相訪問の要務である。我校再
建築の豫算は成べく大目に見て通過させて貰ひたいとの旨を深井理
事からも藏相に勸説して貰ひたいと依頼し、それから二三を訪問し
て、約束の十二時頃日本銀行へ着いた。

そうしてその焼跡で茶も飲めず、握飯を食して待つたが午后二時
に至るも藏相は來られない。そこで深井理事から藏相官邸に其旨を
通ずると、藏相はつい近くまで日本銀行總裁であつたが爲めに、藏
相官邸へ来て呉れと言ふべきところを日本銀行ととり違へたことが
判つた。然してこの時は既に藏相は樞密院の會議に出席する時間にな
つて居たので、再訪問を約され其儘空しく横濱に引返したのであ

つた。今日なれば震災ナンセンスとでも言ふべきであろうが緊張し切つた當時は決して笑へた話ではなかつた。

次の日は二十三日である。學校の運命を左右し、同時に横濱市の前途に重大な關係をもつ、この移轉命令をどう切り抜けようか、私はこの背負切れぬ大きい問題を持つて、先づ市役所に市長を訪ひ、商業會議所に會頭を訪ひ、非移轉説を述べ、渡邊市長並に井坂會頭の賛成を得た。翌日は暴風雨であつたが、本牧三ノ溪に原富太郎氏を訪ひ同様の意見を述べて賛成を得た。この日更に學校に於て教員一同に私の決心を述べて其賛成を得た。更に二十六日には、市長渡邊勝三郎、商業會議所會頭井坂孝、市會議長平沼亮三、復興會長原富太郎諸氏はいづれも上申書に連署した。その上申書は次の如き全

文である。上申書は私の執筆したものに中村房次郎氏の指圖により市の檜岡徹氏が加筆したるものである。

今回の震災に依り横濱市は全滅の悲運に遭ひたりと雖も、市民は從來未聞の勢を以つて市勢の挽回に熱中し、曩に市會は滿場一致、横濱市の復興を決議し、近くは官民合同の下に横濱復興會を設立し、貿易に、産業に、其他各般の事項に付、積極的活動を開始し、今や舉市一致寢食を忘れて新都市の建設に努力せざるはなし。政府亦夙に帝都の復興と共に當港復興の大方針を確立せられ、現に總理大臣を始め、當局者より屢々當市責任者に言明せられたるところなり。然るに頃日仄聞する所に依れば、横濱高等工業學校を一時他に移轉し、授業を開始せむとの議ある由、素より臨時應急

策に過ぎずと雖とも、斯の如きは熱狂せる市民をして、政府の眞意を誤解せしめ、爲めに極度の激昂を招來するに到るべく、國策上極めて遺憾とするのみならず、當市復興上一大障害たり。宜しく如上の事情御賢察の上、直ちに當市に應急設備を施し、速かに授業を開始せらるゝ様御詮議を仰度上申候也

大正十二年九月二十六日

横濱復興會長 原 富太郎

横濱商業會議所會頭 井坂 孝

横濱市會議長 平沼 亮三

横濱市長 渡邊勝三郎

文部大臣 岡野敬次郎殿

私はこの移轉反對上申書を持つて二十七日に文部省に赴き、實業局長に提出した。その時私は附言した。當時の日誌を摘記する。

二十七日

東京に行き文部省にて前日の上申書を實業局長へ呈出し、大臣へ傳達を願ひたり。且つ附言して曰く、小生は地震と火災は危く免れて命拾ひをしました。若しも高工が名古屋へ避難することを主張したなら、横濱市民から竹槍で殺される筈でした。折角命拾ひをしたのですから竹槍は御免です。

越えて月末三十日には横濱市會が開會され、學校非移轉の決議を

なすに至つた。移轉反對はこの決議をもつて一段落となり。其後豫定の如く十一月一日を以つて一齊に開校するを得た。私共は進むべき道を進み、採るべき手段を採り、爲すべきをなして所期の安住を得たのであつた。然かも全校教職員百〇二名、一家四名として四百〇八名中一人の死傷者もなく、又全校生徒三百六十名中死傷者の一人もなかつたことは、誠に天祐と言はねばならない。私はこの點を大震災災中最も感謝すべき一つとしてゐる。

國民精神作興の詔書

未曾有の大震災災に對しては、深く大御心を惱ませ賜ひ、九月三日には攝政宮殿下の御沙汰書を拜し、越へて十二日詔書を拜したる

が、重ねて十一月十日國民精神作興に關する詔書を渙發せられた。

爰に於て我校は、同十二日急造バラック校舎、即ち現存せる建築學科物置きに集合することゝしたが、同建物は僅かに雨露を凌ぐに足り、且室内狹隘なる爲め、區劃の壁、備品等を取方付け、辛くも全員を收容するを得たのであつた。

同日集合したる教職員並に生徒の多數は、親しく大震火災の體驗者であり、若くば目撃者であり、加ふるに荒廢に歸した母校の慘狀と悲壯なる雰圍氣にあるの秋、思ひ設けざる有難き詔書を拜したる事として、其感激言語に絶し、滿堂肅然、只だ感涙に咽ぶのみであつた。私は詔書捧讀の後、此の未曾有の大震火災の焦土死灰の中より、異日國家棟梁の大材が輩出するものなりと言つて生徒を鼓舞した。

この時の緊張せる全校の精神を永く後世に傳へん爲め、爾後毎年九月一日を期して、開會せる震災追憶會に於ては、當時の國民精神作興に關する詔書を捧讀し、以つて當時を偲ぶを恆例としてゐる次第である。

燒跡整理の奉仕

自ら求めて灰燼の中に踏み停まつた私共は、此灰燼の中から立派な復興の花の咲き出ることを信じてゐた。果然十月一日學校の燒跡に生徒並に卒業生の有志が會合し、母校復興を旗幟として勞力奉仕の團結をなすに至つた。更に同志の糾合をなすべく檄文を發したが、その内容は次の如く、一讀當時の感激が卒直に言ひ現されてゐる。

檄

嗚呼、我が親愛なる會員諸君にして、誰かこの震火による本校の悲惨なる焼失を傷まざるものあらん。

今や横濱及び近郊にあつて、この大震火に同一の不幸なる運命に陥つたるものも、身を容るゝに足るべき假宅の出來を遅しとして、本校の復興のために起ち、而して又遠方の地にあつて、本校の不幸を憂ふるもの交通の不便を意とせずして來濱登校し、同じく本校復舊のために一臂の力を致さんとするもの期せずして一團體を作るに至り、今日焼け跡に有志として大會を開けり。

吾々は全市及び本校の無残なる焼け跡を見るにつけても、一倍の大勇氣

を以て復舊に力を盡すべき念益々切にして、愛校の精神と鐵腕との高く響
鳴するものあるを覺ゆ。來れ！愛校の念に燃ゆる我が校友會會員諸君。集
れ、自治自發に平素志操を練る有志諸君！

大岡近在にして吾々愛校の念に燃ゆる正義の勞働を慰するため、安全の
住宅を提供せんとするもの既に五十軒に及べり。食物に對する憂も更らに
なし。乞ふこれ等に對する心配は少しも持つこと勿れ。

ハンマー・ツルハシ、シヤベル等便宜持參せられたし

大正十三年十月一日

横濱高等工業學校校友會有志

斯くして燒跡整理工事は即日より開始せられ、同月二十日に終了

したが、勞働に従事せる者百三十九名、延人員七百四十七名となつた。工事中は各自校庭露天に於て自炊して奉仕を續けたのである。又別動隊は、東神奈川なる横濱舍密研究所の分教場並に日本カーボン會社の寄宿舎を同様整理工事を行つたのであつた。

この愛校運動のリーダーの一人に應用化學科一年在學生比嘉樽吉君がゐた。比嘉君は九月一日は郷里沖繩縣に歸省中であつたが、我が校が大震災火災の被害中にあることを知るや、直ちに二十五里の道を那覇市に出で、便船を求めて東上の途に就いたが、途中幾多の障害に會ひつゝ、一念屈せず、北陸線を迂廻して、九月十七日辛ふじて横濱に入るや、私の宅を訪ねたが會するを得ず、訪ふこと三度にして面接したのであつた。その時比嘉君は私に『母校や市の復舊のた

めなれば、人夫となつても働きます。多少でも役に立つことがあれば是非使つて下さい』と熱誠面に溢れて言つた。私は比嘉君が従来一再ならず公事に献身努力してゐることを知つてゐるので、一層君の至誠に動かされた。焼跡の整理工事中も君は卒先して事に當り、範を示すことが頗る多かつた。

比嘉君は大正十五年卒業後、平素私淑したる後藤新平伯邸に奇遇し伯の知遇を得つゝありしが、其後郷里に歸り沖繩縣立工業學校に奉職し、功績大に見るべきものがあつた、然るに不幸にして校務出張中俄かに病を得て昭和三年二月病没した。私は大震災災を偲ぶ毎に比嘉君を追想するの情甚だ切なるものがある。

震災記念獎學資金

開校によつて震災應急策は、外部的には兎に角形を整へたのであつたが、内部的にはこれからの問題が残されてゐた。大震災火災に依る直接の被害者は生徒の内にはなかつたが、間接的に、其父兄或は後援者中災禍によつて打撃を蒙り、爲めに學資の途を絶たれ、就學困難にして、學を廢せざるを得ない者が十三名を算するに至つた。之等の生徒を救濟することは焦眉の急を要したので、先づ震災記念獎學資金なるものを設け、補給すべき人員を目標として金額を六千圓と定め、其内三千百圓は在學生、卒業生並に教職員に於て醸金し、殘額二千九百圓は之れを一般篤志者の寄附に仰ぐことゝした。

其方法として生徒は向一ヶ年間、一人六圓宛、卒業生は同五圓宛を醸出し、教職員は俸給年額二百分の一以上を醸出することゝした。この結果教職員負擔の金額は豫定の額に達し、又一般寄附に於ても神戸高等工業學校校友會より九十圓八十六錢、秋田鑛山専門學校學生一同より五十圓、三菱合資會社より五百圓、久原鑛業株式會社より二百圓、我校卒業生より九十五圓、隈部朴氏より二十圓、寺門徳太郎氏より十圓等の寄附を得たが、在校生並に卒業生の醸金意の如くならず結局の總額は四千數百圓となつた。

この集まつた淨金を以て取敢へず十三名の者に學資を補給し、卒業後に於て無利子で隨時返却せしむることゝした。然し其後に至つて死去其他の事故により返濟を完ふすること不可能となれる者若干

を算したる等のため、資金は漸次減少を來し、之が補給を計るにあらざれば、其機能を完ふする能はざるに至つた。加ふるに年月の經るに従ひ、大震火災に依る補給者の外に一般在學生中にも補給を必要とする者を生ずるに至つたので、之が急に備へる爲めに新たに互助主義拾錢會なるものを組織した。

この互助主義拾錢會は、全校教職員、生徒が一喫の煙草、一回の電車賃を互に節約し、各自毎月拾錢以上の零碎なる金錢を、各所各學級に配置したる醸金箱に自發的に投入し、一定の期日に之れを蒐集するものである。

幸ひにして全校一致互助の精神をよく發揮して現在高七千七百餘圓を算するに至つてゐる。この醸金は總て震災記念獎學資金に繰入

れ、目下引續いて若干の生徒に學資を補給しつゝある。

この企ては一般社會の共鳴を得て神戸市長谷川佳平氏より五百圓、を初とし若尾幾太郎、中村房次郎、渡邊利二郎、野村洋三、片山久壽頼其他諸氏からも寄附金を得て健全なる發達を遂げつゝあり、大震火災の記念として有意義の企圖たりしことを疑はない。

斯くして創設せらる

我校は大震火災に先立つこと三年半、大正九年一月十九日を以つて本校設置の旨を公布せられた。これより四年前大正五年廣島市に高等工業學校が新設せらるゝの噂あり、井上準之助、佐野善作、中村房次郎氏等之を耳にして、中村房次郎氏は時の文部大臣高田早苗

氏を訪ねて、横濱市にも高等工業學校を設けられたしとの希望を開陳されたが、文部省に於ては若し設置するとせば高等商業學校を可とするの意嚮であつた。然し當時の横濱市は市是として、工業招致、工業都市を提唱したので中村氏の力説により文部省の意嚮も亦變更せらるゝに至つた。

又一方には當時の横濱正金銀行頭取井上準之助氏等の援助により、縣及市より學校創立費を政府に獻納することゝなり、當時の神奈川縣知事有吉忠一氏其他の斡旋によりて敷地其他の準備を了し、大正五年十二月二十二日神奈川縣知事の名に於て、横濱市に高等工業學校を設置せられんことを文部大臣に申請したのであつた。

この申請と同時に神奈川縣及横濱市より創立費として大正六年度

から四ヶ年間繼續で七十五萬圓及び敷地二萬坪餘を寄附し、同月二十八日に採納され、現在我校敷地中區大岡町字中の町、久能下に巨る面積二萬千〇七十一坪が選定せられた。

大正六年十月東京高等工業學校校長阪田貞一氏外四名を以つて我校創立委員を囑託せられ、建築工事は大正八年度から起工し建築總坪數千九百六十三坪、之が建築費六十五萬八千八百圓、校舍十一棟、實驗室及工場六棟其他附屬建築物を同年度中に完成した。越へて大正九年一月十九日勅令を以て本校の設置を公布せられた。

同日私は學校長として任命されたのであつたが、これより前我校が横濱に設置される噂のあつた時私は東京高等工業學校に奉職してゐたが、同校教授波多野重太郎氏から度々私に學校長たる意志なき

やと内意をたゞされたが、私はその任に非ざる旨を以つて答へた。

其後同校長手島精一氏から『今度横濱に高等工學學校が出来るが、お前がやつて見てはどうか』との話があつた。私はその時受諾したともしないとも一切明答しなかつたが、更に文部省實業學務局長松浦鎮次郎氏から電話があり『私邸へ來て呉れ』と言ふことであつた私が訪ねると『横濱高等工業學校の創立委員會を設けたが君は委員長の心得で居てもらいたい。これが創立の曉に校長になつて貰ふつもりである』と言はれた。又重ねて『完くお任せするから大に努力して貰ひたい』と言はれた。私はこの『お任せする』と言ふ一言に非常な感激を以つて直ちに受諾の旨を答へた。私は今日までこの時の『お任せする』と言ふ一言を確く信じ、そうして實行してゐる積

りである。

最初の教職員人選を了して、これ迄文部省内に置かれた事務所を横濱に移し三月二十四日に第一回の入學試験を施行し、四月十三日から授業を開始した。機械工學科、應用化學科、電氣化學科の三科であつた。

落成した各建物の外に残された、柔劍道場は大正九年度に竣工し、續いて講堂は大正十年度に竣工し、壹千名を收容し得ることゝなり、瓦斯、水道、電氣を自由に使用し得るの外、活動寫眞等一般公衆の使用にも便利を與へたもので我校の誇りであつた。

開校式は大正十年十月二十九日に講堂で行はれ、同時に兄弟校である神奈川縣立商工實習學校の開校式を兼ねられた。同十二年の三

月十七日第一回の卒業者を社會に送り出したのであつたが人員は機械工學科三十二名、應用化學科三十三名、電氣化學科三十名の外各科の選科四名であつた。この喜びを迎へた我校は僅か半歳を経ずして、大震火災の襲ふところとなつたのであつたが、急造バラックに次いで假校舎は大正十二年中旬に起工され、同十三年三月上旬に略落成を告げた。その校舎は八棟二千二百五十坪、其工費二十四萬五千圓であつた。これ即ち現存の校舎である。十三年四月には舍監を置かずして、寮生の自治に任せたる、寄宿寮二棟を開設し、興風館並に復興館と命名した。

増科と校運の發展

世に焼け太りと言ふ譬があるが、大震火災復興後の我校は校運益々開け、恵まれた日が續いた。即ち大正十四年建築學科の増設となり、昭和二年造船工學科及び附設工業教員養成所の増設を見るに至つたのである。増設科のうち建築學科は、大正十二年大震火災の直後横濱復興會が組織せられた時の陳情によつて設置されたもので同會は、原富太郎氏が推されて會長となり大正十二年九月三十日に創立總會を開かれたのであつたが、其日原會長の挨拶は實に悲壯を極め、出席者に非常なる衝動を與へたが、その結論に於て次の如き一齣があり、以つて當時を偲ぶ事が出来ると思ふ。

吾々は他人の援助を叫ぶ前に於て、先づ自ら奮起しなければなりません。

先づ自ら背水の陣を張つて、而して後他の援助も同情も期せずして來るの

であります。

漫りに他人の援助にのみ依頼するは、却つて他の援助と同情を却ぞくるの結果となるに外なりません。苟くも吾々市民たるものは、何處までも横濱なる焼残りの城に籠城して、事若し成らざれば各々枕を並べて討死するの覺悟を今日に定むる事が肝要であると信じます。

この横濱復興會に、私は總務部並に工業部の委員となつたが、十月十六日の工業部委員會に於て、石塚彦輔、出口直吉兩委員から我々に土木、建築の兩科を増設し、縣立商工實習學校に色染科を増設すべき旨を附議可決し、續いて總會に於て可決の上、之が陳情委員を擧げた。その陳情書は次の如し。

横濱高等工業學校擴張の件

由來關東及東北地方の生産物は横濱港に於て、海外に分散せらるゝもの多く、特に帝都の物産に於て然りとす。若夫れ輸入品に至りては、當港は重要な關門にして、大小の貨物此地を經由せざるはなし、今若し之等の原料を當地に於て加工し。之を需要地に移出するに於ては、其利便と國益とは蓋し舉て數ふべからず。今や未曾有の大震災に遭ひ、萬事其根柢より立て直しを要するとき、工業都市の建設は刻下の急務にして、總て技術者養成機關たる横濱高等工業學校を直ちに復舊し、更に進んで其規模を擴張し、従前及び既定計畫の學科の外に建築及び土木の二科を増置せらるゝを得ば、當市復興を促進する其幾何なるかを知るべからず。願くば如上の事情御賢察の上願意御採用被下候様至急御詮議を仰度奉懇願候。

大正十二年十月 日

横濱市復興會長 原富太郎

文部大臣岡野敬次郎殿

右の陳情書を携へて、平沼亮三、出口直吉、中村房次郎諸氏と私は十月二十六日文部省に出頭して詳細陳情するところがあり、文部省に於ては之を諒としたるも、大藏省側との交渉困難となつたので原富太郎、井阪孝、中村房次郎三氏並に私はその間に立ち大藏省に再三出頭して大藏次官、主計局長等に懇談を重ねた結果、土木科を除き、建築學科を増設するの諒解を得たのであつた。同年直ちに豫算を計上せられ叙上の如く大正十四年を以つて開講するに至つた。

又造船工學科は、東京、大阪の兩高等工業學校が工業大學に編成變へをせられ、其結果東京高等工業學校に設置せられた電氣工學科を我校に移し、大阪高等工業學校の造船科を神戸高等工業學校に移すの方針であつたが、昭和三年に至つて神戸高等工業學校は造船科の移管を拒否し、他の學科を選択するに至つた。

爰に於て全國高等工業學校中唯一の學科たりし造船科は、其姿を没するの悲運に遭ひ、我海運界の前途に一抹の暗影を投ずるの狀況となつた。私は之の事を耳にして、近時列強と伍して聊も遜色なきに至つた、我造船界の爲め、將た又帝都の關門たる我横濱港の立場より一顧せざるべからずと考へ、我校に割振られたる電氣工學科が卒業生の需給關係よりするも、又既に其設置準備を整へたるに拘ら

ず、之を放棄して、之の際造船工學科を選むことが横濱なる地方的立場より緊急なるべきを自覺し、我校商議員に協りて其賛意を得、文部省に申請して遂に造船工學科を設置するに至つたのである。造船工學科の新設は、我校の希望なりしと同時に、又文部省の希望するところであつた。文部省に於ては之の意味に於て、將來造船工學科を直轄専門學校に増設するの必要なる機運到來する場合は、先づ我校の造船工學科を擴張して之に充當し、他に新設せず、との記録を本省に留め置くべしと説明せらるゝところがあつた。

然して同科設置と共に、時代の推移に鑑みて航海と並立して將來發達すべき航空の研究に着目し、航空機研究方面に特種の努力を拂ふの計畫を樹てた。同科は叙上の如く昭和四年度第一回の生徒募集

をなし、昭和七年度に第一回卒業者を出す豫定である。

斯くして現在我校の包含する學科は五科並に附設教員養成所を併せ、在學生總數五百三十三名、卒業者總數九百五十八名であるが、校運日々に榮へ、毎年募集人員約百八十名に對し應募人員二千名を突破するに至り、全國専門學校中其入學比率に於て首位を占むるに至つたことを欣幸とするものである。

然ども私共は決して現状を以つて足れりとするものではない。絶へざる努力によつて、更に百尺竿頭一步を進めねばならぬと考へる。即ち將來に於ては建築學科と兩立すべき土木科の増設並に、造船工學科の犠牲となりたる電氣工學科の増設は當然招來せらるべき特權であると考へる。

自由教育の趣旨

我校は開校以來教育方針として、皇室中心主義を大本とし、又明治大帝の下し賜ひし、教育勅語を遵奉するを以つて教育の根柢としてゐることは勿論である。特に我校は先年故久邇宮邦彦王殿下より、畏くも「聖壽萬歲」の御染筆を下賜せられ、之を篇額に收めて、式日毎に講堂に掲げ奉るを行事としてゐる。

本校の趣旨は全校生徒にも透徹せるものゝ如く、過る大正天皇御不例の際は、全校生徒が學校當局と何等打合せなく期せずして校庭に集り、徒歩伊勢山皇太神宮に參拜して、御平癒を祈願し奉りたるが如きは今猶記憶に新たなるところである。

斯る根本精神の上に立ち我校は、更に専門學校令に準據して、工業に従事すべき者に高等の學術、技藝を教授するを以つて目的としてゐる。然し又一つの學校としては、其存立の意義を明かにする爲めに、何等かの特色がなければならぬ。

我校は其使命として、第一に技術上の智識の外に、一般社會及び經濟に關する智識の修得に對し、特別の注意を拂ひつゝある。惟ふに我國は現在並に將來に於て、益工業國たるの本質を備ふべきであり、其本質的要素は資本と勞働の二大要素でなければならぬ。この二大要素に對する智識と理解を有することが、即ち將來工業界に立つ者の人格的必須の條件でありと言はねばならぬ。従つて國家の歴史や哲學の上に基礎を置ける、社會及び經濟の智識は、圓滿なる徳

性の涵養上又欠ぐ可らざる條件と言はねばならない。我校はこの意味に於て正規の學科の外に、隨時特別の講座を設け、生徒の修養に資せしめつゝあるは、實に之の見解より出發せるものである。

次に我校は其所在する横濱市が、古き貿易港として長崎と共に最も早く、最も廣く世界に其名を知られ、加ふるに現今六大都市の一として、海外工業と極めて密接の關係ある點に深く留意し、之の環境に順應する爲めに、所謂殖民地的物産の研究に特別講座を設けて、支那を始め、南洋南米に至るまで、工業上の物資の研究に努力し、卒業生の海外發展に援助を與へ、又は海外事情研究國體を常設し、近くば造船工學科を新設して、只管斯方面の研究に貢獻せんことを念慮としてゐる。今後も益海外工業原料、海外事業計畫、輸出工業

品製造等に主力を傾注し、以つて國家の盛衰を左右すべき國際貸借關係に、寄與する所あらんことを期してゐる。

然して斯る教育は、其目的を達成せんが爲めには、成べく自由に、且啓發的の教育を施すにあらざれば、決して成果を收むべきではないと信ずる。即ち生徒は之を最も自由なる境遇に置き、其天賦の才能を阻害せず、恰かも春光慈雨に浴する花木の如く、其天稟の才能を培養し、發育せしめねばならぬ。決して日蔭で成長せしめ、陰雨に腐朽せしむるが如きことがあつてはならないのである。

然らば自由とは何んぞやと言ふに、之は決して放縱の意味ではない。自由は容易に氣儘となる傾向があり、又屢々自由と氣儘とは混同せらるゝ懼がある。若しこの區別を判然せしむるにあらざれば、

到底教育の目的、修養の効果は期せられないのである。何んとなれば自由は人を向上せしむれども、氣儘は人を墮落に導くからである。若し自由を履き違へて、學課を欠席するも自由であり、遅刻するも自由でありとしたならば、既に墮落の淵に落ちたものと言はなければならぬ。或は規定せられたる校則を顧みざるが如きことあらんか、之れ亦同じく墮落であつて、自由と氣儘の混同に外ならないのである。

然らば眞の自由教育とは何んぞや、と言へば自由教育とは人間天賦の才能に適應したる教育を施すにありと答へなければならぬ。我々に學ぶ生徒は、法律、經濟、文學、醫學等の諸學科を選ふことなくして、特に工業に志した者である。其天賦の才能は工業に適應し

たりと考へた結果に外ならないのである。然しこれは中等學校五年の課程に於ける資料と經驗とを土臺とせる判斷であり、必ずしも的確なる自覺なりや否やは多くの疑を挾む餘地なしとしない。否々我校に學ぶこと三年の後に於てさへ、猶其的確を期することは困難であるかも知れないのである。故にこの自覺を出来る丈け眞に近からしむるや否やは懸つて教育効果の成否に關するのである。

去れば我校は學校令に基き身體健全、思想堅實、智識豊富なる技術者を社會に供給し、製造工業の現場に従事せしむべき使命を有するとは言へ、決して生徒を強制して同一鑄型の人物たらしめようとはするものでない。或者は工場の現業員たり、或者は研究室に創意的研鑽に従事し、或者は工業製品の販賣取引に従事し、或者は工業

上の著作に志し、或者は工業教育に従事すべく、千差萬別各々其欲する所に天賦、天稟の才能を發揮せしめ、些かも其才能、徳性を阻害することはなく、自由に其發達を促進せしむるにある。即ち名教は自然なのである。これ即ち我校の標榜する自由啓發主義教育の眞諦である。

私共は一致協力して、學校經營の中樞である校風樹立の爲めに努力十年を費した。古人の句に、清風徐に來つて、水波起らず、とある。校風も徐々に吹き興せば波瀾を生ずることなく一抹の清風となるであらう。急がず急かず今後一層の努力を繼續せんことを誓ふものである。

無試験無採點主義

我校の學風とする自由啓發主義の樹立は、決して之を訓練に求むべきではない。各自の自覺、責任に直面しての自覺、研究に對しての自覺、困難に對しての自覺、之等の意味の自覺を措いて他に求むることは出来ない。故に我校は之の意味よりして生徒の自覺、自發を要求すること甚大なのである。業を卒へて社會に出で、責任を重んずる人、名節を尙ぶ人、彼は頼もしき人、彼は苦節を共にするに足る人と、吾も許し、人も許す人格者は無理解なる束縛より脱し、監視なき自由の環境にあつて、自發的の薰陶を受くることによつて始めて生れ出づべきものと確く信ずるものである。之れ我校が無試

驗、無採點主義を採用して所謂試験的勉強より青年を解放したる所以である。

然しながら斯の如きは言ふべくして行ひ難きところである。凡そ集團生活は如何に嚴格、細密なる規則を設くるも所謂一糸亂れず、整然たる秩序を保つが如きことは難事中の難事とされてゐる。況んや其總てを解放して、然かも猶其成果を擧げんと欲せば須らく集團構成の各個人が其責任と義務の完璧を期するの外はないのである。我校はこの完璧に向つて二六時中絶へざる努力を繼續する一つの修養團體なのである。

我修養團はこの理想の下に、難行苦行をなしつゝ茲に十年の歲月は流れた。冷靜に過去を顧れば其成績の誇るべきものありとは自負

し得ない。然し乍ら又同時に其成績に於て必ずしも悲觀すべきものなりとは考へられぬ。教育の功果如何は之を短日月の經驗に徴して早計に批判し去るべきものではないと考へる。我校の主義とし、主張とするところも畢竟するに多年の歲月によつて解決せらるべきものであつて、今茲に豫斷を許されぬところであるが所信よりすれば必ず其花を開き實を結ぶべき秋の到來すべきことを疑はざるものである。

現代教育に對する不滿

我校は叙上の如き主義、主張に基いて教育を実施してゐる。實を言へば私は現代の教育に對し、尠ならず不滿を感じてゐる一人で

ある。私の観るところによれば、多くの學校は皆單純に職業的教育を施してゐるに過ぎないやうに感ぜられる。即ち學校に於て理學、工學、法律、經濟等を學んで技術家となり、辯護士となり、判檢事となり、官吏となる、其方面は相異なるも、歸するところは職業を目標とする教育に過ぎないのである。この爲め立派な技術家が出來鐵道や、電氣事業や、其他のものが能く設備せられて、凡ての事柄が便利となり、官吏や法律家がいづれも社會組織並に制度の樹立に努力するであらう。然しそれで決して人間社會は安定するものではない。又幸福の増進を招來するものでもない。又國家の基礎が堅實となつたとも考へることは出來ない。

そは歐洲に於て近時異常の發達をなしたる職業教育の跡を觀れば

其功過の數は極めて明白である。即ち世界大戦争を惹起して、彼の悲惨極まりなき末路を作つたものは畢竟するに職業教育の餘弊にあらずして何んぞやと言はざるを得ないのである。

今日我國より歐洲諸國を視察する人士は等しく復興の歐洲を徒らに三嘆して、其由來する所を洞察することが尠ないやうである。然し乍ら若し我國にして猶自ら悟らざれば、遠からずして其轍を踏むなきやを保し得るのである。何んとなれば歐洲の職業教育に其範を倣ひし我教育制度は、既にして行詰りを生じてゐる。各方面には不平、不滿の聲が萌してゐる。

斯る状態の下にありて、如何にして難關を脱し、局面を打開すべきかと言へば、我國の教育は之を技術の習練のみに偏するの不可な

るを悟り、又智識の習得のみに偏するの不可なるを知り、人格養成の重大なることを感知し、其手段を講ずることによつて始めて完き教育と言ふことが出来るのである。

然るに世に行はるゝ人格養成教育なるものを見るに、勉強であれ忠實であれ、信用を重んぜよ。曰く何、曰く何と凡ての道德的項目を並べてこれを奨励し、鞭撻し、若し之に違反する者あらんか、即ち之を懲戒、處罰する所謂道德主義教育である。

而してこの道德主義教育は、教育者自身が既に道德家であり、又人格者であると言ふ立場から出發してゐる。果して然らば斯の如き状態に於て、現代青少年は満足して學業に就くものと考へられ得るであらうか。

現代青少年が學校にあるや、心ある者の多くは、不滿ながら、不平ながら其校則に服従し、唯無事に卒業證書を得て、卒業の特權により就職の機會を望むに過ぎずして、彼等は決して學校生活に於て眞に生きてゐる、愉快なる修養の道場なりとは決して考へてゐないのである。従つて人生に對する明るい氣分を消滅し、共存共榮の奉仕的精神を消磨するに至るは蓋し理の自然と言はねばならぬ。

即ち社會に出で、自己の價値に生くることを忘れ、正義に立つことを忘れ、金力や權力に生きんことに焦慮するに至るのである。幸ひにして成功せば、其獲たる權力に耽溺して前後を忘却し、朝に此主義、夕に彼の主義と、些かの定見なく、臨機應變、御都合主義をこれ事とし、恰かも迷へる羊の如き觀を呈するものが多いのである。

これ我國職業教育の弊竇にあらずして何んぞやと言はざるを得ないのである。

爰に至つて道德主義教育も無力である。假令無力ならずとしても微力であると斷言せざるを得ない。これ即ち我校が所謂道德主義教育を踏み越へて、自由教育主義に則り、之を根柢としたる職業教育を実施しつゝある所以である。

無處罰と無賞主義

道德主義教育を超越したる、自由教育的職業教育を實施するに當つて、先づ第一の關門は道德主義教育の金科玉條とする懲戒主義を打破するにある。換言すれば無處罰主義即ち之れである。我校は開

校十年の久しきに亘り、未だ曾て所謂校規に觸れ、校則を破り、其が爲めに停學若くは放校等の處分を受けたる者は一人も之無きのである。

然らば其間所謂校規、校則に觸るゝ者が皆無であつたかと言へば決してそうではない。斯る完璧を期すべく私始め教職員一同は餘りに不徳、餘りに無能なることを告白せざるを得ないのである。

然し乍ら私は十年の久しきに亘つて未だ一人の處罰者を出さないのである。そは罪惡を犯したる者を校門の外に放逐し、以つて校内を淨化し得たりとは到底考へ得ないのである。停學を命じたりとて必ずしも改悛を期し得るものとは考へ得ないのである。

處罰主義教育によつて、何處に共存共榮の意義があり得ようか。

何處に奉仕的精神があり得ようか。何處に社會互助主義の精神があり得るであらうか。

若し教育は學問を教へるのみが全目的だとすれば、學問を教へるに不適當だと考へる者は、それを容赦なく處罰し、又は放逐すれば事は足りるのである。然し其結果、處罰され、放逐されたる者の前途は如何なるであらうか、その過れる者の將來を教育することが教育本然の目的ではなからうか。思ふて之所に至れば屢々長太息を禁じ得ないのである。

私は自ら奉ずる教育方針により、常に少數者を罰して、多數者を懲すことなく、全體を擧げて相互理解の途に導き、自治自覺の下に教育し、又教育せらるゝと言ふ基調の下に努力しつゝある。

私は無處罰主義を信じ、其主義に基いて努力しつゝある。然して私をして常に勇氣付け、其所信を固くせしむるものは實に聖書の一節である。即ちヨハネ傳の第八章に次の如き意味が記されてゐる。

イエスが橄欖山に登つて行くと、其處に多くの人々が教へを受けやうと集まつて來た。ところが學者とバリサイ人の一群が、一人の婦人を連れて來て、イエスの前に引き据へ、この婦人は姦通の現行犯である。此の如き罪を犯した者は、モーゼの律法では、石で撃ち殺すことになつてゐるが、どう處置するがいと思ふか、と彼等はイエスに質した。

イエスは身を屈めて指先で地面に何か畫いてゐたが、その質問には何んとも答へなかつた。そこでバリサイ人達は切りにイエスに答辯を迫つた。

するとイエスは靜かに起つて言つた。

『爾曹のうち罪なき者、まづ彼を石にて撃つべし』

そう言つてイエスは、又身を屈めて地面に何か畫いてゐた。その間に冷靜に復したバリサイ人達は自省と共に、各自の良心にひしひしと責められて來た。

一人去り、二人去り、逐に残るものは只イエスと婦人とのみとなつた。

この時イエスは再び身を起して婦人に言つた。

『婦よ爾を訴へし者は何處に往きしや、爾の罪を定むる者なき乎』

そう質ねると婦人はおそるおそる言つた。

『主よ、誰もなし』

そこでイエスはまた再び婦人に言つた。

『我も爾の罪を定めず。往きて再び罪を犯す勿れ』

聖書のこの一齣こそ現代教育者の正に服膺すべき金言でなければならぬ。

私は無處罰主義を奉ずると共に無賞主義を實施してゐる。然して各種賞品の授與、特待生、優等生の表彰等を全然行はぬことゝしてゐる。これ少數者を賞して、多數者を獎勵せんよりも、之を賞せずして、相互理解と自治自覺に導くことにより緊要なるを信ずるが故である。

目標の樹立

我校は特種の校風を持つてゐる。然しながら眞に偉大なる校風を樹立せんと欲せば、須らく偉大なる目標を樹立せねばならぬ。

我國が過去に於て旭日の如き興隆を續けて來たのは、一面に於て其國家的目標の偉大なりしが爲めである。即ち明治二十七、八年に至るまで清國を目標として、全國民が協力一致した。そうして目指す清國と戦ひて勝ち、其後、再び露國を目標とするに及んで國民は擧げて、其目標遂行の爲めに奮闘努力を續けたのであつた。

其結果は言ふまでもなく明治三十七、八年の戦役となつた。然してこの目標は當時の我國としては確かに大き過ぎる目標であつた。

而も猶之を達成することが出來た我國民の歡喜と満足は手の舞ひ足の踏むところを知らざる有様であつたのは無理からぬ事ではあつ

たが、之が爲めに慢心と油斷を生ずるの不幸を招致したのである。

更に續いて起つた歐洲大戰の爲め全く不時に分不相應なる利得を占むるに至つたのである。其結果國內には所謂成金を簇出せしめ、然かも同時に我國の目標を喪つたのであつたので、國民は愈其節度を失ひ、遂に今日の如き國運の不振を來すに至つたのである。

然し乍ら我國は徒らに不振なる現状を長嘆するのみではならない。眼を轉じて列強を洞察し、高所に登つて世界を展望する時、不景氣と緊縮の聲に脅へて、萎縮之れ事とすべきの秋ではない。去ぬだに我國は今や種々の國難に襲撃せられてゐる。

就中その大なるものは、外國の資本主義的壓迫、特に米國の壓迫は愈々益々急を告げてゐる。若し現状のまゝにして推移せんか、恐

らく米國星條旗の下に屈するの駄むなきに立ち到るであろうことを憂慮せらるゝのである。この結果、我國は單なる一勞働國として僅かに餘燼を保つの外なきに至るであろう。即ち形を變へたる印度、埃及と同じき悲運に遭遇すべきことを憂ふるものである。（私は斯く言ふも決して戦争などを夢想せるものではない。只だ産業上の角遂を意味するのみである）。

我國はこの眼前に突付けられた目標をさへ認知することをなさずして、只管萎縮これ事としてゐるのは、誠に不甲斐なきこと、言はねばならぬ。我國民は其目標の何たるかを自覺して、往年の積極的意氣を振作し蹶起し、以つて米國の資本主義的壓迫を脱せねばならぬ。この覺悟、この意氣こそは即ち我校の保持する目標である。

私は毎年夏期休暇中歸省中の全校生徒に慰問状を送るを慣例としてゐるが、過る昭和四年に於ける同書の一節に次の如きものがある。

御承知の通り、新内閣が成立しまして所謂經濟困難の解決策として緊縮政策を着々實行してゐます。之は日頃私が主張して居ります所と合致することでありまして、甚だ同感の次第であります。諸君も亦御同感の事と存じます。

我國は曾て清國、露國を目標として國策を樹立し、今日の國運を招致したのであります。然るに其後に國家は大なる目標を喪ひ、同時に國民は徒らに成金氣分に陶醉して、終に今日に於ては種々なる國難を豫想するの止むなきに至らしめました。殊に海外資本主義の壓迫、就中米國の壓迫は益

急を告げてゐます。

若し現状のまゝで推移しますならば、恐らく我光輝ある日章旗は、米國星條旗の下に屈するの歇むなきに立到るやも計られません。其結果我國は單なる一勞働國として僅かに餘燼を保つの外なきに至るだろうと恐れるのであります。

若し斯る事實が豫想せらるゝとすれば、我國家の前途は實に由々しき次第でありまして、誠に憂慮に堪へないのであります。諸君はこの一大國難に遭遇して、我國工業立國の前途を双肩に負ふの覺悟がなければなりません。切に諸君の自奮と自重を望む次第であります。

次に昭和五年度に於ける同書には次の如き一節がある。

我國狀を觀察いたしますと、實に寒心に堪へない事が多々あります。政治、經濟、産業は國民自主によるとは言へ、仔細に其内容を詮索する時は、多くは其根柢に於て米國の爲めに引きづられ、徒らに追従し、後塵を拜しつゝある悲むべき状態が認められます。

之れ畢竟するに、米國資本主義の壓迫と存じます。國民的發憤、努力の目標は將に斯の如きの壓迫から脱出するにありとは、老生の屢々諸君に説く處であります。國家は常に大なる目標を定めて、猛進すべきであると思ひます。同様に我々は産業に於ても其種目に關せず、夫々の目標があるべき筈であり、確乎たる主義方針を以て其目標に突進せねばなりません。

然るに我國現下の状態は、國家自體も既に進むべき目標なく、産業又然

りであります。即ち國家は指導的精神を缺き、産業の各種目に於ては歸趨する處を知らずして、徒らに目前の利害に齷齪たるの觀があります。斯くては國産獎勵や、消費節約や、産業合理化の聲を大にするも恐らく不徹底に終るの外なしと考へます。

諸君、我々同志は工業立國の前途を双肩に擔ひ、社會の先驅となり、五里霧中の我國家と我産業に對し、確然たる目標を定めて一層の奮勵努力を期したいのであります。

文化と創作力の重心

現代文化の表現としては、自動車があり、飛行機があり、ラヂオがある。然し自動車、飛行機、ラヂオを持つもの必ずしも文化國で

あり、文化人であるとは言へない。現に之等の諸機械は我國にも澤山あるが、これを以つて我國の文化とは言へない。只だ持つてゐると言ふ丈けであり、他國のものを使用してゐると言ふに過ぎないのである。

只だあると言ふ丈けであれば、馬來半島にもあれば、瓜哇にもあり、スマトラにもあり、ボルネオにもあり、セレベスにもある。故に其國の文化とするには、其國の發明であり、創作であり、機械藝術を以つて作り上げたものでなければならぬ。即ち其意義の根柢には創作力の動きが潜在してゐると言ふ事は、最も大切なる點である。人間の職業は廣い意味に於ては、凡て藝術的であり、藝術は創作を求めて邁進するものである。

凡そ一國々民が創作力を失ふ時は、其國家の歸趨する處は、國際間に於て勞働國となるより外はない。我國は世界の一等國と誇り、三大強國と誇つてゐるが、何故一等國であり、三大強國であるかと言へば、それは軍備の點に於て勝れてゐると言ふに過ぎない。文化の點より言へば遺憾ながら常に債務國の立場にあつて、曾て債權國とはなり得ないのである。果して然りとすれば、我國は後世文化史上に於て一等國として、將た三大國として歴史に其名を残すことが出来るであらうか。惟ふて爰に至れば眞に寒心に堪へない次第である。

斯く重大の意義を有する創作力は、自由啓發の洗禮を受くることによつて大成するものと私は信ずる。故に我校に於ては生徒の訓育

は勿論、學校百般の施設は等しく、この方針に出發點を置いてゐる
即ち我校に於ては一般の慣例の如く、各科に科長を置いて、該科の
施設を統一するが如きことは之を避けて、事務取扱なるものを置き
一年交替を以つて該科の事務を司らしめてゐる。然して各教授は專
心其專攻に向つて精進し、生徒の薰育と同時に自己の研究を完成せ
しめ、併せて各教授の自由、自治を尊重し、些かも容喙することな
からんやう努めてゐる。

我校の斯る方針は、自ら各教授間に好學の氣風を醸成せるものゝ
如く、我校教授にして學位論文を作成する者相次ぎ、既に六名の理
學及び工學博士を出すに至つたことは、我校の甚だ欣快とするこ
ろである。

勿論之等の各教授は、其天稟の素質と努力とによつて贏ち得たる賜物であるであらうが、同時に我學風に陸離たる光彩を添へたるものと信じ、其風格の全校生徒に及ぶべきものあるを信ずるものである。冀くば今後とも引續き毎歲教授間に學位論文提出者の現れんことを期待するものである。

産業開發と我校

我校の所在地たる横濱市は工業都市の建設に努力しつゝあり、我校とは特に密接なる關係にあり、其積極的活動に待つものが多い。

我校は毎年舉行の開校記念祭日に於ては、一般に校内を開放して諸般の設備を觀覽せしめ、殊に工業に對する興味を理解し得るやう

諸種の實驗的設備をなしてゐる。

又文部省主催成人教育、並に講演巡回等を時々開催して工業智識の普及に努め、又諸講習會並に工業相談部を置きて實際的の指導をなし、又常設的に横濱工業懇話會並に互助主義公心一圓會を組織してゐる。

横濱工業懇話會は、工業及び工業教育に従事するものにして、横濱市並に附近に在る者相會して、毎月一回名士の講演を聴き、意見の交換をなし、氣脈相通じ、以つて斯界の向上發達に資するものである。大正十一年五月第一回を開會し、爾來回を重ねること八十四回、現在會員二百數十名を算してゐる。

互助主義公心一圓會は、我校の發起主催するものにして、會員は

多く横濱市有志者である。毎月一圓を醸出し、市内に於ける工業研究者に補助を與へ、又其研究の相談相手となるのが目的である。現在資金約三千圓、外に約六百圓を補助支出してゐる。

今や地方産業の開發の急務なるに際し、之と密接の關係にある我校は一般人士より充分活用されんことを望んで歇まない。

海外發展の機關

海外發展は我校の校是とするところであるが、私は大正十四年七月より八月に亘り、外務省の對支文化事業學生支那視察團の團長として支那に赴き歸校したが、この時生徒間に海外發展の具體的機關を必要とするの意嚮あり、生徒中比嘉樟吉、齋藤與次兩君其他が中

心となつて一つの團體を形成した。

然して其名命を私に求められたので、「大陸會」と名命した。この名命は私の持論である。我國は島國にあらずして、アジア大陸の一部なりとの意味を表徴したものである。

我國は工業的原料に欠乏せりと言はれるが、之は我國を孤立したる島國と考へる結果である。若し我國がアジア大陸と陸続きとなり其東海岸を占むるものと考ふるならば、決して工業原料に不足は感ぜないのである。只だアジア大陸と我國の間に海が横倒つてゐると考へる心理的作用の爲め其發展を阻害せらるゝのである。

我國の外交も、政治も、經濟も、教育も皆大陸と陸続きでありとの觀念の下に出發すべしとは私の主張するところである。

この年の十月、會の創立と共に發會式を舉行したが、故後藤新平伯の熱心なる贊意あり、同伯並に藤山雷太、後藤朝太郎諸氏の講演があつた。其後隨時講演會並に研究會を開き、又毎年夏期を利用して支那、米國其他の方面に旅行團を送りつゝある。

この外我校卒業者にして、海外に渡航する者遂次増加し、其方面も支那、南洋、墨國、ブラヂル、アルゼンチン、英國、佛國、米國の各國に亘るの狀況である。

誇るべき校友會の活躍

我校の校友會は教職員並に生徒各個に會費を分擔し、其協力によつて、趣味並に體育に關する各種部門を設け、兩者の親睦を旨とす

るのが目的である。

然して我校校友會に於ける一ヶ年の會費は七千五百餘圓で、其屬する部門は總務、出版、講演、音樂、繪畫の趣味方面に屬するもの五部の外に野球、庭球、陸上競技、劍道、柔道、水泳、端艇、弓道、ラ式蹴球、ア式蹴球、籠球、山岳の體育に屬するもの十二部を算してゐる。之の外直接校友會に屬せずして、自治的に事業を遂行せるものに射撃、乘馬、アルコール、ヴォーレ、ホツケー、航空の六體育部、ラヂオ、映畫、寫眞、英語、エス語、獨逸語、俳句、基督教、合唱、漢詩、園藝等の趣味に屬するもの十一部總計三十四部を算へてゐる。斯の如く多數の部門を校友會に包含することは他に多く類例を見ざる所である。以つて我校々友會の活動を證するに足ると信

ずる。

又外部的には各種大會、各校對抗定期戰、主催大會を行ひ、自他を裨益するところが多い。従つて其成績、記録の誇るべきものが尠くない。本昭和六年度上半期に於ける業績を見るも野球部が全國高專關東豫選並に全國高工大會に優勝したるが如き、陸上競技部が全國高工聯盟大會に優勝したるが如き、又水泳部、端艇部が各横濱四專門學校大會に優勝したるが如き其他の各部いづれも相當の成績を收めてゐる。

我校は授業時間數極めて多く、四季を通じて午前八時を以つて始業時間と定め、午后四時に至るが爲め、練習の機會少なく、又加入部の數多き爲め豫算の配當充分ならざるに拘らず、成績に於て見る

べきものあり、然かも各部とも生徒の自治に任じて過りなきは、我
校風の誇るべき一たるを信ずるものである。

我 校 復 興 建 築 の 經 緯

我 校 は 大 震 火 災 後、應 急 工 事 と し て 假 校 舎 を 建 築 し、一 方 復 興 豫
算 と し て 百 七 十 一 圓 を 計 上 せ ら れ た の で あ つ た が、諸 種 の 事 情 の 爲
め 今日 に 至 る も 未 だ 着 手 を 見 ず、依 然 た る 假 校 舎 に 七 年 を 過 し た の
で あ る。殊 に 建 築、造 船 の 學 科 の 如 き、市 の 小 學 校 バ ラ ッ ク 建 築 の
古 材 を 移 し て、使 用 し て 居 る 慘 狀 で あ る。

然 かも 昭 和 二 年 より 五 年 に 至 る 繼 續 事 業 と し て、建 築 を 完 成 せ ら
る べ き で あ つ た が、我 校 現 在 敷 地 の 地 盤 軟 弱 の 爲 め、基 礎 工 事 に 要

する費用の大なるに拘らず、該費用を豫算上に増額せらるゝ事なく、又開校以來我校の性質上其所在地として稍便宜を欠ける等の爲め、大震災火災直後神奈川方面に移轉の議が起つたが、假校舍竣工となり其後大正十四年十一月商議員會を開いた結果、現敷地に決定し、只校舎の位置を敷地交換により後方に移動せしむることゝなつた。

然るに昭和二年八月校舎地盤軟弱を理由として再び移轉問題を惹起し、事態急となれる爲め商議員會を開會し、附議するところがあつたが、其結果私は京濱各新聞社員を招き、席上我校は移轉せず、復興建築は現在敷地に再築すべき旨を聲明するに至つた。

其後銳意復興建築の進捗に努力し、文部省並に我校より建築委員を選出して協議を遂げ、或は豫算増額を具申するところがあつたが、

孰れも具體的效果を擧ぐるを得ず、就中昨年成立せる濱口内閣の緊縮政策の犠牲となりて、既定豫算額より更に減額せられ百數十萬圓となつた。

諸物價は今日低落せりとは言へ、敷地工事に失費多き爲め所期の建築を得ること困難なるも、兎に角來春四月には實際着工せらるべき機運となつてゐる。

我横濱市は帝都の關口にして、外客の第一印象の地であるから、努めて特色ある様式を採用し、直轄専門學校式の劃一的様式に拘泥せざらん事を望んでゐる。

我校復興建築に當つては、特に商議員中村房次郎氏に感謝するところが多い。

各科の過去現在

我校は現在五科と附設教員養成所から成り立つてゐる。即ち五科は機械工學科、應用化學科、電氣化學科、建築學科、造船工學科である。各科の過去現在につき該科に於て執筆されたものを左に録することゝした。

機械工學科

我科に於て創立當時より今日に至る間に特筆すべき出來事は、先づ創立當時は豫算少なく、地盤は頗る軟弱で加ふるに物價漸騰し而かも當機械科は、最後に廻されたるため建築物は縮少せられ、殊に

熱機關室の如きは外觀堂々たるコンクリート造りであつたが、其の實は縣立商工實習學校共同で建築を爲し、共同で使用する約束の下に單にコンクリートブロックを積み上げたるに過ぎない、極めて粗雑な建築であつた。其の敷地も僅々八十四坪で、其の他の建物も貧弱であつた。

設備に於ても物價高の折柄で思ふ様な數量を購入出來ず、外國注成品の如きも納期の延期するの止むなきに至つたため甚だ不完全で授業にも支障を來すの有様であつた。

當時實習の教師を招聘せんとするも希望者甚だ稀であつたが澁谷氏の之に應じたのは特筆に値する。同氏は多年東京木型界の重鎮で老年に拘はらず、尙老後を工業教育のため奉仕せらるゝに至つた特

志家であつたが其の後幾何ならずして病の爲めに逝つた。誠に惜しむ可し。教授としては秋田鑛山専門學校より赴任せられし伊藤萬太郎氏あり。其蘊蓄を傾倒せられて只管吾が機械工業界に盡瘁せられたが、大正十二年三月に名古屋高工機械科の科長に榮轉された。次いで中原益治郎氏は震災當時病氣の故を以て退職、東京帝大より更に大坂工業大學に轉任せらる。之れより先河合匡教授は東京高等工業學校より本校に轉せられ同時に外國に留學大正十二年七月歸朝、幾何もなくして彼の大震災火災に遭ひ、爲めに復舊のため山下誠太郎教授と共に大いに盡力せられた。時恰も遠藤政直教授は多年の苦心の結晶たりし支那双橋無線電臺に設備すべき速度調整機を据付のため既に大正十二年六月支那へ出張して不在であつた。茲に昔の北京

今の北平郊外にある双橋無線電臺は表面三井物産會社と支那との契約關係により成立したものだ、事實は其の内に日本の遞信省の技術官が關係し支那に於ける無電權獲得に關する日本の重大使命を帯びたものであつた。その調整機は速度調整の範圍僅かに上下・一三パーセント以下とせられたため何れの方面にも之れが設計を引受くる者が無かつたが、日本で製作不能とあつて世界の嘲笑を受くることがあつては甚だ残念なりと同教授は斷然之れが製作に着手し、工成るや直ちに當科水力實驗室に於て調整試験を開始せり。爾後授業時間以外の時間を利用して工手山口恵一氏、日浦要之丞氏其他の職工、助手等と共に一意完成に努力、時には夜更けて終電車で辛うじて帰宅することもあり、又正月も元亘丈を休んだ外年中不休の努力

を續けた。斯くして設計より約一ヶ年有餘に及び遂に完成し、之れを双橋に送りて同所の無線電臺に据付を了し、好成績で其の試運轉を了した。然るに突如として日本に大震火災起つたので直ちに各地への諸情報の通報及無電に依る聯絡救助事業等に活躍して大いに貢獻する所があつた。引續き難事とされた對歐州試験にも見事成功して一時無電界に氣を吐き同教授は十一月始に歸期した。其の後同無線電臺は日、米、支三ヶ國の外交問題紛擾の爲め使用に至らず斯るか間に無電界長足の進歩により短波長の時代となり同局は遂に實用化するに至らずして今日に及びしは甚だ残念である。回顧すれば大震火災に當時當科所屬の各教室、製圖室、木型工場、材料實驗室、圖書室其他教官室等烏有に歸し、熱機關室は崩壞の憂き目に遭遇し

たが、機械工場、印刷室、水力實驗室、職工控室は幸にも焼失を免れたのは不幸中の幸とも言ふべく授業開始に當り大いに貢獻するところがあつた。

又外來講師としては鐵道省の重鎮大塚榮一講師を依囑し機關車工學の講義ありしも同講師は一昨年辭職せられ代つて徳永講師を得て現在に及んでゐる。最近又當科を第一回に優秀なる成績で卒業と同時に當科に教鞭を採り一意専心努力せし村上泰助氏は縣立商工實習學校の懇望により同校に榮轉するに至つた。

實驗室其他に就き特筆す可き事は實驗室は、水力實驗室、材料實驗室、熱機關實驗室的三とし水力實驗室は建物貧弱で狹隘なるが、その内容は他校に比し些か誇るに足る可き設備である。過般文部省

の研究奨励補助金を得て低圧高速度水車の研究を爲し近くは渦巻唧筒に關する貴重なる實驗研究の發表ありて世界の學界に寄與するところがあつた。

材料實驗室は河合教授の努力に依り幾多の權威ある機械器具を具備し、正確なる實驗を爲し得る事亦他に比類なく曩には同教授研究の「常溫加工が金屬性率に及ぼす影響に就て」の發表なり。且つは文部省の研究奨励補助金を受けて金屬材料に關する幾多の貴重なる研究がある。

製氷室には二噸の製造能力を有する製氷機を備付け。生徒の實地練習に資せしむる傍ら安價に氷を市民に供給して其の名聲を博したる事もある。

熱機關實驗室にはスويس、ロコモティブ會社製七十馬力のディーゼルエンジンがある。尙同實驗室には昨年山下教授文部省の研究奨励補助金に依り「内燃機關に供給せらるゝ燃料の微粒子に碎かるゝ有様」研究に着手せられ現在引續き實驗中であり、近く學界のために寄與する所があるであらう。其外今尙研究中のものに岡村教授の「分別蒸餾塔の設計方法」に就てがある。

次に當科圖書室は藏書多き方ではないが現今容易に得られざる古き文獻としてのバックナムバーの有るは些か誇るに足ることが出来る。尙河合匡教授の著書に「金屬材料」山下誠太郎教授の著書に「内燃機關」あり。共に機械工學界に重きをなしてゐる。

其他回顧と爲るべきものの中には創立以來數年で建物も漸く

不完全乍ら出来上つたのが一朝大震火災により二三を除く全部が焼失せられ従つて直ちに應急建設したるバラックも依然として狹隘であり、創立以來眞に落付いた建物に居る事が出来ない。従つて職員の研究も亦學生の勉學のためにも幾多の不便を感じてゐる。尙當科は市民諸氏によき理解と利用あらん事を望む事、甚だ切である。

應用化學科

一、徹底的自由教育主義

學校長の標榜せらるゝ無採點無處罰に依る「人間を拵へろ」自由啓發の教育は本科に於て最も徹底してゐる。若し學校長の方針の効果を實際に知るには本科の卒業生に就いて調査するが最もよい。

手前味噌ではないが卒業者の社會に於ける業績は年數の少いたため世間的には目立たぬが勤務先の風評は概して甚だ良好である。又在學生の狀況は各専門に於ては勿論其以外にも出色である。専門以外に學生生活の表現は之を校友會に見らるゝが、校友會に新たなる部を作ることか或は或部の興隆時代をリードした者は殆んど本科の學生で占めてゐる。一二の例を擧げて見れば端艇部、出版部、映畫研究会の創立或は其發源、大陸會の創立、學生飛行術研究、或は震災後學校の復興、横濱市民生活の荒涼たる頃、其生活を豊かにしリズムを與へて精神内に復興を刺戟した音楽部の全盛時代等等。

本科の職員は學校長と専門を同じくするためもあつて學校長の主義主張の發生する學校長的人格並に閱歷を其眞髓まで熟知して居て

創立以來學校長の方針と共唱したに基くのである、先づ實驗實習に重點を置き各學生の天稟を誘導助長するに努めて居る、之も自由啓發主義の然らしめる所ではあるが特筆に價するであらう、卒業生を出すこと八回二百八十七名に達するが死亡者僅に六名で、日本各地方並に、アルゼンチン、メキシコ、アメリカ、ヒリツピン、支那、フランスに迄分布してゐる、本學生は合計百三十三名、三年生、三十七名、二年生四十二名、一年生四十一名、工業教員養生所、二年七名、一年六名で何れも無試験入學詮衡に依る者である。是等無試験入學生の現在までの成績は筆記試験入學時期に比して優るとも劣らない狀況である、學生は和氣譖々として勉強し陰鬱を感じる事項の發生がない、又クラス中甚だしく見劣りのする者を生じない、創

立以來の職員中、教授長俊一氏は督學官となつて文部省に、教授相木一三氏は理學博士となつて間もなく不幸逝去、教授草間時蕃氏は理學博士となり益々學生の指導に當らるゝ筈であつたが其研究の工業的實施のため職を辭されたので表面的には關係が消えたが尙準職員と考ふべきである、中本助教は創立當時の學生の忘れ得ぬ人であるが吳の海軍の學校に居られる、教授五名、外人一、講師二、助教一、助手六、現在の職員中獨乙人レーゲンスブルグ博士あるは特色として數ふるに足り年齢二十九歳の新進學者であり學生の友人とも見られる獨身の青年である、助手六名は何れも本校若しく他の高等工業出身者である、斯く職員の狀現は理想とまでは行かぬが可なりに充實してゐる。

電 氣 化 學 科

横濱に高等工業學校が設立せられたる時同時に吾が電氣化學科も獨立した一科として誕生し早拾年の歲月を經過した。

從來電氣化學なる部門は横濱高等工業學校に設置せられる迄は獨立した一科として定めたるは僅かに、東京高等工業學校とその他は熊本高等工業學校に於ては、電氣工學科内に其の一部として設けられて居つたのみである、吾が鈴木校長は將來其の必要を感せられ純然たる一科として此れを定められたは電氣化學工業發達の爲め喜ぶべき事であつて、現今工業界に於てこの電氣化學の樞要なる位置にあるを見ても鈴木校長の明察に敬服し且つ又感謝する所である。勿

論電氣化學とは、電氣的エネルギーと化學的エネルギーとの關係に就て研究し、これを工業的に應用せんとするものであつて、我國の如く電源が豊富であつて、天然資源に乏しい國に於ては、電氣化學工業の發達によつて始めて工業立國の目的を達し得らるゝものと考えられる。

繰へつて電氣化學科設置の當初を考へるに其の設備、内容共に誠に寂寥々たることは今日とは雲泥の差があつたが、職員、生徒の協力によつて開設以來次第に内容充實し、漸く其の形態整ふや、突如關東大震災に遭遇し、總ての苦心努力の結晶は烏有に歸して仕舞つた然し、流石の震災と雖も吾々の經驗、智識までは奪ひ去ることは出来なかつた、更に勇氣百倍、捲土重來の勢で回復に努めた結果、

今日に於ては災害以前よりも其の設備内容に於て充實し、國內に吾が電氣化學科の名聲を普遍するを得たのは、本校のモットーである、自由主義の精神を體した教職員、諸生徒の奮勵努力の結果と云はねばならない。

大震災當時藤村教授は既に海外留學より歸朝され、其の最新智識を傾けて孜孜として電氣化學科の改善發達に努められ、横山教授は獨逸留學中で將來の大發展に備へ、此の他、富山、小林、藤川、櫻井の諸教授、馬場、柿澤、戸田職員等、銳意其の發展と特色の發揮に努められた。

震災後は、横山教授の歸朝につき藤川教授の在外研究飯沼、竹内兩講師の來任、つゞいて飯沼教授在外研究に出た。同教授歸朝の曉

には高壓及電氣材料化學の發展期して待つべきものがある。

一方富山講師は先年學位を授けられ其の透徹なる頭腦と、實際工業に明きとは當電氣化學科の誇りとするものである。

當科三期卒、河村氏は卒業と同時に助教授に任命され櫻井助教授と共に分析を担任せられたが幾許もなくして櫻井氏は長逝せられ以來今日まで河村氏一人分析の重任に當つて居る。ちなみに櫻井氏は濃厚篤實の學者にして氏の長逝は實に當科に於ては勿論又國家的にも誠に惜しむべきことである。

尙當科設置の最初より盡力せられた小林助教授は商工實習學校の應用化學科長として榮轉され、四期卒中島氏これと代り、二期卒正木氏又米國よりの歸朝後講師として來任せられた。

當科二期卒業生は大震災當時は三年生にて、其の業務の一頓坐を思はれたが、總ては、燒土の中よりの意氣にて應化と共に生麥の横濱舎密研究所にて不自由を忍びながら實驗を爲し授業に實驗に大なる支障もなく卒業し、同時に一期卒業生の作りたる基礎の上に職員と共に協力切磋琢磨の修養機關電氣化學科會を組織し會誌を發行すること此處に七回に及んでゐる。斯くして既に拾年を経たる今日卒業生を出すこと八回その數三百に垂んとしてゐる、電氣化學科は當初より自由啓發の眞髓を學課に又運動に發揮し、卒業後は此れが爲る處に歓迎せられ従つて其の就職範圍廣く、實地に研究に、独自の立場より眞摯に努力し將來我國の電氣化學工業の大發展は當科の卒業生に俟つ所大なるものである。

電氣化學科の内容は、年と共に等比的に充實した、先づ此れを圖書の點より見れば僅か數十冊に過ぎなかつたものが現在には、千百冊以上に及び特に其のバック、ナンバーに至つては、正に隔世の感がある、實に藏書の多き事と、當校の採用する、オーナー、システムとは他校の垂涎おかざる所である、

又學科内容は何れも雲泥の相違があるものであつて、現在に於ては、一般電氣智識を習得せしむる爲に電氣工學、特別高壓實驗、殊に近年、絶縁材料の重要なるに鑑み特に電氣材料化學の講座を設け同時に其の實驗も併せ行つて居る。

電工担任教授は、竹内、藤川兩氏であつて、竹内教授はテレビジョンに就て藤川教授は、理研囑托を兼ね高壓電氣材料について夫々

研究中である、ラヂオ俱樂部は、俱樂部内に、私設短波長實驗室を有し日夜これが研究に精進して居る、

分析實驗は、河村助教此れを担任し、一年間に、定性、定量、一般分析、試金術、特種分析、電解分析等を行ひ、化學者としての基礎を授け同氏は傍ら、各種の研究を行ひ、現在はオゾンに關して研究中である、

製造實驗は、正木講師、此れを指導し着々其の實を擧げて居る、氏は傍らシアン化合物の研究及び酸化還元電位差の研究等を行ひ、報告を學界に發表して居る、電氣化學基礎實驗及び電鍍は、中島助教此れを見、益々將來研究すべき問題多き電鍍方面の開拓に力を盡さんと準備中である、

有機電解、蓄電池等は、横山教授の担任にて近來其の内容、器具共に見るべきもの多く、殊に卒業生を鞭撻して蓄電池を研究し有機電解に就ては、すでに定評があり、其の研究は獨逸雜誌に發表され有名である、電解實驗室には電氣泳動蒸溜水装置、アルカリ、クロリセル等があり生徒實地に此れを使用して居る。

金相學、電氣爐、高溫測定等の科目は、藤村教授此れを指導し實驗に事かきし昔に比し現在は、金相學室に各裝置完備し、金屬内部の構造、其の性質等を明にすることが出来る、此の外高溫作業に直接必要である、高溫測定等の爲には各種の高溫度計を備へ卒業後直に役立つ様になして居る、電氣爐作業は電氣化學科内で最も男性的の實驗であつて三千三百ボルトの交流をインダクション、レギュ

レーターにより低電壓として、カーバイト製造に、電弧爐に、クリブトール電爐に使用してゐる、尙藤村教授室には、×線分析装置がある、斯の如き内容の充實は、電氣化學科の發展となりひいては學生の向上となるもので此れ等器具を極度にまで使用され、能率を益々上げて居る事も電氣化學科の一特色と見ることが出来る。以上の外卒業生、在學生を以て電氣化學會を組織し會誌を發行する事六回、斯界の發達に協力一致猛進して居る。

建 築 學 科

建築學科は大正十二年大震火災を動機として横濱復興會より建議せられ大正十四年五月二十二日文部省令第二十三號として發令せら

れたものである。次て同年四月二十一日授業開始、昭和三年三月第一回卒業生を出し今年三月第三回卒業生を送つた様の次第である。歴史は比較的淺いが建築學科設立は學校に於ても如何に大なる試鍊と抱負とを以て生れたものであるかは、昭和三年三月十五日本校卒業式に於て校長が特に建築學科第一回卒業生の爲めに述べられた告辭によりて明かだと思ふ、茲に之を轉載する。

「……御承知の通り大震災火災によつて東京横濱が忽ち焦土と化しました際に、敢然として立ちました横濱復興會は原富太郎氏を會長とし、災害復興の爲めに勇氣と熱心、其意氣は天を衝くの概を示したのであります。今猶當時を想起致しましても其壯烈なるに血湧き肉躍るものがございます。

然して我が横濱復興會は大正十二年の十月十六日に工業部會を開きまして

我横濱高工の復舊を速かにし、既設三科の外に土木、建築の兩科を増設すべきことを議決致しました。又續いて總會に提出してこれ又議決致しました。この決議は時の岡野文部大臣に上申しましたところ、この議が容れられまして大藏省に廻附されましたが其後迂餘曲折を経まして兩科の内建築の一科のみを大正十四年四月より開設さるゝに至りました。此れ全く原、井坂、中村、平沼、石塚、出口等諸氏の異常なる努力がこの結果となつたものであります。此記憶すべき建築科の第一回卒業生を出しますことは誠に感慨の深いものでございます。同時に産みの親たる横濱復興會に滿腔の謝意を表するものでございます。又横濱復興會に於かれても定めて御満足のことと察するのであります。

私思ひますに一國の文化はどうしても其の國の有する藝術によつて批判

さる可きものと考へるのであります。

一國藝術のうち最も重きをなすものは建築でございます。建築は藝術の最も大にして最も秀でたるものと言ふことが出来ましよう。

然らば何故に藝術は重んぜられるかと申しますとそれは一々人間の工夫、創作によつて出来るものだからであります。これ藝術が一國文化の上に重きをなす所以でございます。更にこの藝術上に於て建築が重きをなす所以はその時代時代、其社會社會の各相は建築によつて後世に残されるからでございます。即ち建築は文化に藝術に必須のものと言はねばなりません。』

造船工學科

開校十周年に際して造船工學科の現状及將來の方針等に付いて一

言述べ。造船工學科の新設は昭和四年の事で現在一年と二年との二學級を有してゐる。

始め昭和四年度に東京大阪兩高工の昇格に依りて兩校の有する各科を全國の高工に按配したる結果造船工學科は大阪より神戸に移る事になつて居たが、何故か神戸で拒絶して土木科が之れに代ることになり、其結果造船科は或は全國の高工から姿を滅する形勢となつたので、常校長が我國の地理上の關係より斷然造船工學科を開設せんと決心せられ茲に我が造船工學科が新設せられることになつたので高等工業程度では我が造船工學科が全國で唯一のものとして關東造船業の中心地たる横濱に開設せられた次第である。

全校舎か假校舎であり従て造船工學科も其れ以上の粗末なる假小

舎で、手狭ではあるが獨立した假校舍二棟を占めて居て講義製圖等には差支へなく設備されて居るが新設の爲め未だ完備の域に達して居ないが追々現圖室、實習室、造船機械室試験室等を整へる考へである。又學校所在地か本邦唯一の大貿易港であり世界のあらゆる方面よりの船舶が出入せる爲め實地見學等には至つて便利で學生の實物教育には至極好都合である。

教授方針としては總て基礎的學理と實習及製圖等に重きを置き、學校卒業後造船所等に入り、直ちに實務の取れる様な優秀なる實際的技術者の養成を期し居る次第である。

又近年航空機の發達か著しき氣運に乗じ特に今春のロンドン會議の結果は協定に依り軍艦等は量に於て制限されたる故に質に於て優

秀なるものを建造する必要に迫まれ、協定外の航空機等に依り國防の安全を期さねばならぬ事となつた、造船學と航空學とは共に流體内を航行するもので、航行の方法も等しく推進器に依ることではあり、互に共通點を多分に持つて居る。卒業の曉此の方面にも向ひ航空機製作等の出來得る様特に意を用ゐ此等の事業に携るべき學生を養成する様になつてゐる。

何れの事業も國家的事業だと云へば云へない事はないかも知れないが、特に造船業航空機製作等は直接國防に關係するものであつて、政府は此等工業の發達すると否とは單に工業の盛衰に關するのみならず、國防上國家の安全を期する上よりして優秀なる技術の進歩發達を促してゐる次第である。従て此等工業の進歩發達の爲めに

は種々の方法を以て獎勵してゐる。即ち造船用鋼材及外國の外出來ない品、又は特許品等の輸入に對しては輸入税を免除され、使用者側に對しては航海獎勵又は指定航路に依りて補助金を附與されてゐる。斯く國家的の使命を帶び工業の中堅となるべき優秀技術者の養成を任務とする爲め當科は相當重大性を持つてゐるものである。ただ一年二年の二學級に過ぎないが志願者は採用人員の約九倍に達し相當俊才を收容するを得、前途の進展を囑望してゐる次第である。

我 校 八 年 略 史

十年史を編む筈であつたが、大震災火災の爲め一切の記録を失つたので、其後の八年史を録することゝした。我校の略史として資するとこ

ろがあれば幸甚である。

大正十二年略史

- 一、大震災ニ因ル當校被害狀況文部省へ報告（九月二日）
- 一、震災善後策ニ關スル職員會議ヲ教授飯塚晶山氏宅ニ於テ開催（九月七日）
- 一、震災ニ因リ杜絶シタル交通機關ノ一部漸ク通ジタルヲ以テ鈴木校長ハ大山、小林ノ兩書記ヲ隨へ文部省（東京高師ニ避難）ニ出頭（九月十七日）
- 一、市内要所（校門前、日本橋際、馬車道、横濱驛前ノ四個所ニ「假校舎ヲ急造シ成ヘク速ニ授業開始ノ豫定」ノ立札ヲナス（九月十四日）
- 一、米澤高工ヨリ慰問使トシテ吉田教授、渡部助教授ノ兩氏來校（同日）

- 一、桐生高工ヨリ服部弘氏外四名慰問使トシテ來校（九月十六日）
- 一、藏前工業會ヨリ慰問ノ爲久米書記長來校（九月十八日）
- 一、柴垣文部省建築課長震害調査委員トシテ榎本農商務技師外二名ト共ニ來校（九月二十四日）
- 一、教授會ヲ殘存ノ職工控室ニ於テ開ク（九月廿四日）
- 一、秋田鑛山専門學校ヨリ見舞トシテ山口教授來校（九月廿五日）
- 一、大藏省主計局長、神奈川縣知事ト共ニ燒跡視察ノ爲來校（十月二日）
- 一、濱松高工ヨリ慰問ノ爲中澤、金子兩書記來校（十月五日）
- 一、保土ヶ谷曹達工場長磯村秀策氏見舞トシ來校（十月七日）
- 一、秋田鑛山専門學校生徒代表トシテ飯島永一、北川吉松、高松公三ノ三氏慰問ノ爲來校（十月八日）

一、職員生徒合同茶話會開催（十月十二日）

一、廣島高工蒲地玄造氏見舞ノ爲來校（同日）

一、會計検査院検査官岡正路氏同書記官景山榮志氏横濱地方裁判所長立石謙輔諸氏何レモ災害見舞ノ爲來校（十月十二日）

一、文部省實業教育主事寺崎九一郎、岡篤郎ノ兩氏來校（十月十五日）

一、文部省柴垣建築課長、鳥居工事司計掛長同伴當校假校舍實地調査ノ爲來校（十月廿五日）

一、應用化學、電氣化學ノ各三學年ハ市内神奈川町所在横濱舍密研究所ヲ借受ケ其他ノ各學年ハ燒殘ノ建物及急造バラックニ於テ授業開始（十一月一日）

一、文部省建築課囑託白岩正雄氏應急假校舍建築實地踏查ノ爲來校引續キ

校地内ニ建築事務所開設（十一月五日）

一、在外研究中ノ長教授歸朝（十一月八日）

一、國民精神ノ作興ニ關スル詔書捧讀式舉行（十一月十二日）

一、校友會主催災後慰安音樂會開催（十一月十七日）

大正十三年略史

一、恒例新年挨拶會（一月四日）

一、第三學期授業開始（一月八日）

一、午前五時五十分強震アリ建築中ノ假校舎（間口九間、奥行六十間）一

棟半倒壞

一、武部文部省實業學務局長來校（一月廿四日）

一、東宮殿下御成婚祝賀式（一月廿六日）

- 一、賀川豐彥氏講演（一月三十日）
- 一、鈴木校長文部省視學委員トシテ長野縣下へ出張（二月十一日）
- 一、校友會辯論部大會（同日）
- 一、校友會劍道大會（三月八日）
- 一、三宅雪嶺氏講演（同日）
- 一、第二回卒業證書授與式舉行、徳富蘇峯氏ノ演説アリ盛會（三月十七日）
- 一、本年入學試驗施行（三月十九日ヨリ同月二十二日）
- 一、事務各課新築假校舍ニ移轉（四月六日）
- 一、第一學期授業開始（四月八日）
- 一、新入校友會員歡迎會（四月廿六日）
- 一、會計檢査トシテ會計檢査院ヨリ檢査官來校（五月廿日ヨリ三日間）

- 一、海軍記念日、保村矢風艦長ノ「國防論」講演（五月廿七日）
- 一、鈴木校長文部省直轄實業專門學校校長會議へ出席（五月廿八日）
- 一、横濱開港記念日ニ付臨時休業（七月一日）
- 一、「文化ノ債務」ト題シ鈴木校長講演（七月十日）
- 一、故松方公爵國葬當日ニ付弔意ヲ表シ臨時休業（七月十二日）
- 一、中村房次郎氏本校商議委員囑託（七月十五日）
- 一、神奈川縣知事清野長太郎氏本校商議委員囑託（八月十五日）
- 一、第一回震災追憶會（九月一日）
- 一、校友會文藝部主催ノ左右田博士講演（十月十四日）
- 一、第四回開校記念祭（十月二十九日ヨリ三日間）
- 一、校友會文藝部主催文藝講演會開催、吉田弦二郎、芥川龍之助兩氏講演

(十二月十三日)

一、隣接町民招待忘年音樂會(十二月十四日)

大正十四年略史

一、新年挨拶會(一月四日)

一、横濱復興會長原富太郎氏外同會工業部委員數名復興設備視察ノ爲來校
(一月十五日)

一、早大教授五十嵐力氏講演(二月十三日)

一、校友會辯論部卒業生送別雄辯大會、田子一民ノ歐米漫遊談(二月十四日)

一、端艇部新艇三隻ノ始漕式舉行、鈴木校長バナマ、マゼラン、スエズト
命名(二月廿一日)

- 一、校友會總會並卒業生送別會（二月廿七日）
- 一、各科三學年遠藤教授引卒宮城拜觀（二月九日）
- 一、午前十時半第三回卒業證書授與式舉行、井上準之助氏講演（三月十七日）
- 一、入學試驗施行（三月十九日ヨリ四日間）
- 一、本年新設ノ建築學科生徒募集並ニ願書受付開始（四月一日）
- 一、建築學科入學志願者二二〇名ニ入學試驗施行（四月十一日）
- 一、建築學科授業開始（四月廿一日）
- 一、校友會總會並新入會員觀迎會（四月廿二日）
- 一、校友會講演部新入生歡迎講演大會（五月二日）
- 一、天皇皇后兩陛下銀婚祝賀式（五月十日）

一、軍事教育實施ニ關スル校長ノ講演（五月廿六日）

二、岡田文部大臣、松浦次官、武部實業局長、柴垣建築課長、窪田會計課長、神奈川縣知事等來校巡視ノ後生徒一同ニ對シ大臣ヨリ一場ノ訓話

（六月十日）

一、講演部主催全國大學專門學校學生雄辯大會（六月十四日）

一、橫濱開港記念日臨時休業（七月一日）

一、對支文化事業視察學生團團長トシテ鈴木校長支那へ出張（七月廿五日）

一、在外研究中ノ池内教授歸朝（七月廿九日）

一、文部省測地學委員會ヨリ四名來校敷地調査ノ爲滞在（八月十九日同廿日迄）

一、第二回震災追憶會（九月一日）

- 一、横濱市長有吉忠一氏本校商議委員囑託（九月十七日）
- 二、鈴木校長「始業ニ當リテ及支那ヨリ歸リテ」ノ題下ニ講演（九月十八日）

大正十五年略史

- 一、恒例新年挨拶會（一月四日）
- 二、講演部主催擬國會開催（二月六日）
- 三、大陸會主催藤山雷太氏ノ南洋視察談（二月十九日）
- 四、午前十時三十分第四回卒業證書授與式舉行、高橋是清氏講演（三月十五日）
- 一、本年度入學試験施行（三月十七日ヨリ四日間）
- 二、防火演習施行、第二消防署長以下十數名、ポンプ三臺參加（五月十二日）

- 一、 中華民國留日學生監督所學務科長張振漢氏本校視察（五月十八日）
- 一、 學校長ヨリ左傾思想取締ニ關スル文部大臣訓令ノ説明（五月十九日）
- 一、 縣下専門、中學等校、市青年聯合團、在郷軍人會橫濱市聯合分會主催ノ演習並新兵器ヲ職員生徒一同見學（五月廿二日）
- 一、 大陸會第五回講演會開催田鍋安之助氏ノアフガニスタン旅行談（五月廿六日）
- 一、 海軍記念日ニ付海軍大佐林季樹氏ノ海軍飛行機ニ就テ講演（五月廿七日）
- 一、 故李王殿下國葬當日ニ付敬弔ノ爲臨時休業（六月十日）
- 一、 大陸會主催ブラジル領事野田良治氏ノ南米事情ノ講演（六月十一日）
- 一、 各學科三學年縣下小田原、箱根方面ニ於テ野外演習實施（六月廿三日）

ヨリ同月廿五日マデ)

一、松浦文部次官來校、横濱開港記念日臨時休業(七月一日)

一、各學科第二學年野外演習(九月廿一日)

一、田中文部政務次官、武部實業學務局長、矢野文部事務官來校(十月廿一日)

一、長慶天皇皇代ニ列セラレ宮中ニ於テ申告ノ儀行ハセラレタル爲臨時休業(十月廿二日)

一、開校記念祭施行(十月廿九日ヨリ三日間)

一、大陸會主催講演會、鈴木校長ノ南洋事情講演(十二月八日)

一、聖上陛下御惱御平癒祈願ノ爲職員生徒全部市内伊勢山大神宮ニ參拜

(十二月十七日)

一、聖上陛下崩御ノ公報文部省ヨリ達シタルニ付職員生徒ハ直ニ講堂ニ參集葉山御用邸ノ方向ニ遙拜シ、鈴木校長ハ一同ヲ代表シ葉山御用邸ニ伺候天機ヲ奉伺ス（十二月廿五日）

一、天皇皇后兩陛下 大正天皇皇太后陛下御還幸ニ付職員生徒奉迎送（十二月廿七日）

昭和二年略史

- 一、大喪中ニ付恒例ノ新年挨拶會ヲ廢シ各職員登校各自挨拶（一月四日）
- 一、鈴木校長諒闇中ノ新年ト題シ講演（一月十日）
- 一、御渡歐中ノ秩父宮殿下御歸朝職員生徒棧橋ニ奉迎送（一月十七日）
- 一、大陸會講演會後藤朝太郎氏「支那民族性と揚子江流域の形勢」ト題シ講演（一月廿四日）

- 一、教練查閲トシテ一旅團長廣瀬少將來校（二月三日）
- 一、大正天皇御大喪儀ニ付臨時休業、學校長鹵簿内參列ノ爲上京
校庭内ニ於テ遙拜式舉行（二月七日）
- 一、神奈川縣知事池田宏氏本校商議委員囑託（三月四日）
- 一、徳富蘇峯氏の「昭和一新論」講演會開催（三月五日）
- 一、第五回卒業證書授與式舉行男爵田健治郎氏ノ演説アリ（三月十七日）
- 一、本年入學試験（自三月廿二日至同廿五日）
- 一、新學期授業開始（四月八日）
- 一、學校長「前内閣ノ總辭職ト教訓」ト題シ講演（四月廿七日）
- 一、有吉横濱市長「横濱市ニ就テ」ト題シ講演（五月三日）
- 一、「工業ト金融」ト題シ矢野恒太氏講演（五月廿五日）

- 一、恒例防火演習施行（六月廿九日）
- 一、大陸會講演會後藤朝太郎氏ノ「南支政府と民衆の新傾向」講演（六月卅日）
- 一、横濱開港記念日臨時休業（七月一日）
- 一、震災追憶會（九月一日）
- 一、講演部主催國防思想宣傳講演會開催長岡外史氏ノ「國防と空防」ト題スル講演（九月十七日）
- 一、長俊一教授文部省督學官轉任（九月十九日）
- 一、野外演習ノ爲富士五湖附近へ出發（九月廿日ヨリ四日間）
- 一、開校記念祭諒闇中ニ付質素ニ行フ（從來十月廿九日ノ開校記念日ヲ本年ヨリ十一月一日ニ改ム）（十一月一日）

一、教育ニ關スル御沙汰書寫頒布（十二月十日）

一、大陸會講演會芹澤安平氏「投資及貿易ヨリ見タルブラジル」ト題シ講演（十二月十六日）

一、鈴木校長文政審議會委員被仰付（十二月十九日）

昭和三年略史

一、卒業式慣例ヲ破ツテ午後三時半ヨリ舉行ス、來賓ノ時間的經濟ヨリ割出シタルモノニシテ結果良好ナリ（三月十五日）

一、所謂無試驗制度ヲ採用シテ入學志願者ノ撰拔ヲナス（三月十八日ヨリ同廿二日マデ）

一、柏木一三、池内本兩教授、富山保講師共ニ理學博士ノ學位ヲ授與セラ
ル（三月）草間時審講師理學博士ノ學位ヲ授與セラル（八月）

- 一、荒木東一郎講師時事新報社世界選手一周競走ニ選拔セラル（四月）
- 一、野外教練ノ爲海軍見學ニ横須賀ヘ行軍シ軍艦、工廠ヲ見學シ下士集會所ニ宿泊ス（四月廿四、五日）
- 一、野外教練ノ爲習志野ニ行軍、營舎ニ宿泊シ軍隊ト聯合演習ノ後騎兵、歩兵兩校及鐵道隊ヲ見學ス（五月卅、卅一、六月一日）
- 一、會計検査院ノ會計検査ヲ行ハル、成績良好ノ講評アリ（六月廿一、二日）
- 一、御大典記念事業ニツキ全校職員生徒ノ意嚮ヲ募リ、協議ノ結果御大禮記念地所購入ニ畧一致ス（六月廿五日）
- 一、防火實地演習ヲ校内ニ於テ突發的ニ行フ成績佳良ナリ（七月九日）
- 一、大陸會滿鮮旅行團職員生徒廿一名出發ス（七月卅一日）
- 一、恒例ニヨリ震災追憶會ヲ開キ、握り飯ニ當時ヲ偲ブ（九月一日）

一、校友會野球部専門學校關東爭霸戰ニ優勝シ本校附近市民祝賀會ヲ催ス
(九月廿二日)

一、校友會購演部全國各大學高等専門學校學生講演大會ヲ開會ス(十月七日)

一、御大典奉祝ノ意ヲ表シ校庭菊花壇ヲ擴張本式五花壇ヲ作ル、觀者多シ又生徒有志園藝俱樂部ヲ組織シ校内ニ花壇ヲ設ク(十月)

一、記念祭、御大典ニ因ミ特ニ一日間期間ヲ延長シ盛況ナリ(十一月一日ヨリ三日マデ)

一、横濱工業會第三回總會ヲ開キ社團法人組織ニ改ムル事ヲ議決ス(十一月四日)

一、天皇皇后兩陛下京都行幸啓奉迎送ノ爲全校職員生徒横濱驛並ニ沿線ニ

堵列ス（十一月六日）

一、聖上皇后兩陛下京都ヨリ還幸啓奉送迎ノ爲全校職員生徒横濱驛並ニ沿線ニ堵列ス、猶職員一名生徒代表二名二重橋前ニテ奉送迎申上グ（十一月廿七日）天皇陛下觀艦式行幸奉送迎ノ爲職員並ニ生徒各級代表者四十八名横濱港岸壁ニ堵列ス（十二月四日）

一、學則ヲ改正シ再入學並ニ修業者再考査ノ件許可サル（十一月六日）

一、學校長大禮參列ノ爲京都ニ出發（十一月七日）

一、全校ノ職員生徒講堂ニ於テ御大禮奉祝儀舉式、同夜十四臺ノ花車、牛車ヲ聯ネ提灯行列ニテ市内ヲ練ル（十一月十日）

一、校友會競技部主催第一回關東中等學校陸上競技大會ヲ開ク（十一月十八日）

一、 學校長「御大禮ニ參列シテ」ト題シテ全校職員生徒ニ謹話ス（十一月廿四日）

一、 野外教練ノ爲藤澤町ニ行軍シ、其夜遊行寺ニ宿泊、同境内藤澤中學並ニ同町青年訓練所生徒ト聯合演習ヲナス、又町民ノ爲野外劇、講演、映畫ヲ公開ス（十一月卅日）

一、 三年生全員二重橋前ニ於テ御親閲ノ光榮ニ浴ス、背囊、外被ノ武裝ト

一、 幟式ノ新校旗異彩ヲ放ツ（十二月十五日）

一、 造船學科並附設工業教員養成所新設ニ内定ス（十二月）

昭和四年略史

一、 新年挨拶會（一月四日）

一、 第三學期授業開始（一月八日）

- 一、學校長年頭ニ際シ教育振興ニ關スル御沙汰書ヲ捧讀シテ講演（一月十日）
- 一、久邇宮殿下薨去ニ付學校長ハ職員生徒ヲ代表シテ御本邸ニ伺候奉弔ス（一月廿八日）
- 一、教練查閱ノ爲小川第一旅團長來校、雪中ニ於ケル分列式偉觀（一月廿八日）
- 一、學校教育參考資料並ニ教練使用ノ爲小口徑火炮陸軍省ヨリ一門拂下ゲラル（一月二十九日）
- 一、校友會總會ヲ兼ネ卒業者送別會開催（二月廿日）
- 一、午後三時ヨリ第七回卒業證書授與式舉行、貴族院議員早大總長高田早苗氏來場一場ノ講演アリ（三月十五日）

- 一、昭和四年入學檢定、受験者二千六百十一名（三月廿四日ヨリ同廿七日）
- 一、本年度新設ノ造船工學科及附設工業教員養成所發表（三月卅日）
- 一、安川教授理學博士ノ學位ヲ受ク（四月十八日）
- 一、天皇陛下横濱市復興狀況御親閲ノ爲當市行幸職員生徒奉迎ス（四月廿三日）
- 一、横地講師時事新報社ヨリ「感謝セラル、人々」トシテ表彰セラル（四月廿三日）
- 一、横濱市復興祝賀式ニ付臨時休業（四月廿四日）
- 一、校友會新入會員歡迎會（五月二日）
- 一、尾崎行雄氏ノ時事問題講演會（五月十一日）
- 一、本校應用化學科ガ横濱共同洗濯クリーニング組合ヨリ依頼セラレ過去

一ヶ年間本校内ニ於テ開講セル化學研究會證書授與式ヲ舉行ス修業者百數十名ナリ（五月十二日）

一、備外國人教師獨國ドクトルエンヂニア・アルフレツドレーゲンス・ブルゲル氏赴任（五月廿二日）

一、第二學年野外演習箱根富士裾野方面（五月廿三日ヨリ廿五日マデ）

一、大陸會主催井上雅二氏「現代青年ノ進路」講演（五月廿八日）

一、造船工學科新設披露會（六月五日）

一、柔劍道部主催ニテ陸軍大將本郷房太郎氏ノ武道講演會開催（六月十二日）

一、防火演習舉行（七月一日）

一、野球部主催市民體育復興記念野球大會（六月卅日及七月一日）

一、第三學年野外演習ノ爲横須賀ヨリ軍艦長門便乘清水港へ航行（七月六日ヨリ八日迄）

一、大陸會支那旅行團上海、南京、漢口ヲ視察ス（七月十二日ヨリ八月七日マデ）

一、學校長歸郷中ノ全校生徒へ慰問狀ヲ發ス（七月廿五日）

一、四年度物品檢閲開始（自八月十九日至九月十日）

一、恒例ノ震災追悼會（九月一日）

一、神奈川縣知事山縣治郎氏本校商議委員囑託（九月十三日）

一、神宮式年選宮奉拜代表職員生徒各一名參列（十月五日）

一、野外演習ノ爲第一學年千葉縣習志野四海道方面へ行軍（十月十日）

一、恒例ノ開校記念祭（十一月一日ヨリ三日間）

- 一、第二回全關東中等學校陸上競技大會（十月廿日）
- 一、第一回全關東中等學校排球大會（十月廿七日）
- 一、端艇部神宮競漕ニ出場優勝ス（十一月三日）
- 一、橫濱工業會總會ニ於テ社團法人定款ヲ可決ス（十一月三日）

昭和五年略史

- 一、新年挨拶會（一月四日）
- 一、第三學期授業開始（一月八日）
- 一、學校長「年頭所感」ト題シテ講演（一月十三日）
- 一、劍道部主催第九回大會開催（二月九日）
- 一、昭和五年入學願書受理開始（自二月十日至三月八日）
- 一、校友會總會ヲ兼ネ卒業者送別會開催（二月十九日）

- 一、午後三時ヨリ第八回卒業證書授與式舉行帝國學士院長樞密顧問官理學博士櫻井錠二氏來場一場ノ講演アリ（三月十五日）
- 一、昭和五年入學檢定、受檢者千九百九十名（自三月十七日至廿日）
- 一、第一學期授業開始（四月八日）
- 一、高松宮同妃兩殿下海外御渡航ニツキ職員生徒奉迎送ス（四月廿一日）
- 一、航空研究會發會式、日本學生航空聯盟ニ加盟（四月廿六日）
- 一、第三學年海事思想體驗ノ爲横須賀軍港及海空博覽會等見學（四月廿八日）
- 一、校友會新入會員歡迎會（五月二日）
- 一、在學生徒簡閱點呼執行（五月八日）
- 一、社團法人横濱工業會設立（五月九日）

- 一、帝國大學教授理學博士柴田桂太郎氏「光ト物質」ト題シ講演（五月十四日）
- 一、講演部主催里見岸雄氏講演（五月廿日）
- 一、全國高等專門學校、體育研究會開催（五月廿四日）
- 一、野球部主催第二回市民體育復興記念野球大會舉行、桐生、山梨、名古屋、濱松、福井、各高工參加（自五月廿四日至同廿六日）
- 一、海軍記念日ニツキ海軍中佐松永壽氏「國防ト航空」ト題シ講演（五月廿七日）
- 一、校友會消費組合調査會設置（五月廿八日）
- 一、校舍復興建築實行委員會（五月卅一日）
- 一、大陸會主催法學博士信夫淳平氏「最近ノ世界ノ動キ」ト題シ講演（六月

月五日)

一、遠藤政直教授工學博士ノ學位ヲ受ク(六月十六日)

二、第六回全國高等工業學校陸上競技會開催(自六月七日至同八日)

三、大陸會北米見學員出發(六月廿四日)

四、學校長「時事偶感」ト題シ講演(六月廿七日)

五、本校學術報告第一號(遠藤政直、タービンポンプノ實驗的報告發刊

(同日)

六、防火演習舉行(六月廿八日)

七、文部大臣本校教育施設並ニ復興建築ニ關スル視察ノ爲來校(七月七日)

八、大陸會旅行團南支滿鮮地方見學(自七月十二日至廿九日)

九、昭和五年度物品檢閲(自七月十四日至八月十四日)

- 一、 學校長歸郷中ノ全校生徒へ慰問狀ヲ發送ス（七月廿八日）
- 一、 第七回震災追憶會（九月一日）
- 一、 第二學期授業開始（九月十一日）
- 一、 學校長「新學期ニ際シ學生諸君ニ望ム」ト題シ訓話（九月十七日）
- 一、 第三回全關東中等學校陸上競技會（十月十七日）
- 一、 全國各大學高等專門學校雄辯大會（十月十八日）
- 一、 第二回全關東中等學校排球大會（十月十九日）

昭和五年十月二十八日印刷
昭和五年十月三十一日發行

(非賣品)

編著者 鈴木 達 治

橫濱市中區大岡町

印刷兼 發行人 橫濱高等工業學校

橫濱市中區大岡町

發行所 橫濱高等工業學校